倉吉市文化財調査報告書　第111集

船沖遺跡発掘調査報告書

県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯
総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

鳥取大学附属図書館
0050294636

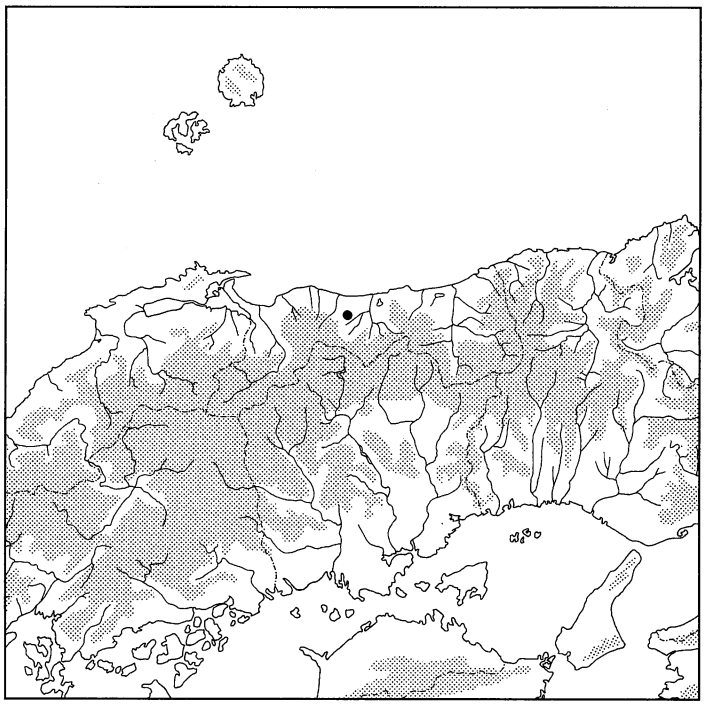
平成12年度

倉吉市教育委員会

倉吉市文化財調査報告書　第111集

船沖（ふなき）遺跡発掘調査報告書

県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯
総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



遺跡略号　４０ＳＦ

平成12年度

倉吉市教育委員会

倉吉市教育委員会寄贈

序

この報告書は、鳥取県倉吉地方農林振興局が実施する県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業に伴い、平成12年度に鳥取県倉吉市下米積字船沖・上乳母ヶ谷、上米積字船沖において行った発掘調査の記録です。

発掘調査の結果、古墳時代の竪穴式住居や掘立柱建物、縄文時代の落し穴などをはじめとする多くの遺構を確認し、この地域に暮らしていた人々の生活の一端が明らかとなりました。

発掘調査の記録としてこの報告書が多くの皆さんに活用され、文化財に対する理解を深めていただく一助となることを願うものです。

最後になりましたが、発掘調査に際してご協力いただきました鳥取県倉吉地方農林振興局、鳥取県教育委員会をはじめ、関係各位に対し深く感謝の意を表すものです。

平成13年２月

倉吉市教育委員会
教育長　足　羽　一　昭

例　　言

1　本報告書は、鳥取県が行う県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業に伴い、倉吉市上米積字船沖、下米積字船沖・下乳母ヶ谷で行った発掘調査の記録である。

2　発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長　足羽　一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員　名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調　査　員　根鈴　輝雄（倉吉博物館主任学芸員）　森下　哲哉（文化財係主任）

根鈴智津子（文化財係主任）　加藤　誠司（文化財係主事）

岡本　智則（文化財係主事）　岡平　拓也（文化財係主事）

調査補助員　山根　雅美・松田　恵子・金田朋子

事　務　局　波田野頌二郎（教育次長　12年９月まで）　景山　　敏（教育次長　12年10月から）

眞田　廣幸（文化課課長）

中井　寿一（文化課課長補佐　12年12月まで）　渡辺　峰寿（文化課課長補佐　13年１月から）

藤井　　晃（文化財係係長）　藤井　敬子（文化財係主任）

山﨑　昌子（文化財係主事）

内務整理　泉　美智子・世浪由美子・松嶋あつ子・竹歳　暁子・山本　錦・米原　満

3　現場での調査は加藤が担当し、山根・金田が補佐した。内務整理は加藤が担当し、山根・金田・松嶋・山本・米原が補佐した。遺物写真撮影は森下が担当した。

4　本書の執筆は各調査員が検討し、加藤が行った。

5　遺構測量のための基準杭設置をアサヒコンサルタント株式会社に委託した。

6　第１図（地形図）は、建設省国土地理院発行の１：25,000地形図「倉吉」「関金宿」「伯耆浦安」「泰久寺」の一部を複製・加筆したものである。

7　第２図（地形図）は、１：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

8　挿図中の方位は、国土座標第Ⅴ座標系の北を指す。

9　遺物に付した記号・番号は本文・挿図・図版で統一している。

10　調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調査の概要 …… 2
　1　遺構 …… 2
　2　遺物 …… 24
Ⅳ　まとめ …… 31
報告書抄録

挿　図　目　次

第1図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図 …… 3
第2図　船沖遺跡調査区位置図 …… 4
第3図　船沖遺跡遺構全体図 …… 5
第4図　1号住居遺構図 …… 7
第5図　2号・3号住居遺構図 …… 8
第6図　4号・5号・7号住居遺構図 …… 9
第7図　6号住居遺構図 …… 11
第8図　8号・9号住居遺構図 …… 13
第9図　1号～3号掘立柱建物遺構図 …… 14
第10図　4号～6号掘立柱建物遺構図 …… 15
第11図　7号掘立柱建物遺構図 …… 16
第12図　8号～11号掘立柱建物遺構図 …… 17
第13図　1号段状遺構遺構図 …… 18
第14図　1号～5号柵列遺構図 …… 19
第15図　1号墳墓遺構図 …… 20
第16図　1号・2号土壙墓遺構図 …… 21
第17図　1号・2号貯蔵穴遺構図 …… 21
第18図　1号～6号落し穴遺構図 …… 22
第19図　1号～5号土壙遺構図 …… 23
第20図　1号・2号溝遺構図 …… 24
第21図　3号・4号溝遺構図 …… 25
第22図　1号～6号住居出土遺物 …… 27
第23図　8号・9号住居、1号土壙墓、遺構外出土遺物 …… 28
第24図　石製品 …… 29
第25図　船沖遺跡時期別遺構模式図 …… 32

図　版　目　次

図版１　遺跡・遺構　調査区北側調査前全景　調査区北側調査後全景　１号墳墓　１号土壙墓　１号貯蔵穴
２号貯蔵穴
図版２　遺跡　調査区南側調査前全景　調査区南側調査後８号・９号住居付近　調査区南側調査後全景
図版３　遺構　１号住居　２号住居　３号住居　４号住居　５号住居　６号住居　７号住居　８号住居
図版４　遺構　９号住居　１号掘立柱建物　２号掘立柱建物　３号掘立柱建物　４号掘立柱建物
５号・10号掘立柱建物　６号掘立柱建物　７号掘立柱建物
図版５　遺構　８号掘立柱建物　９号掘立柱建物　1号段状遺構　１号柵列　２号柵列　２号土壙墓　１号落し穴
２号落し穴
図版６　遺構　３号落し穴　４号落し穴　５号落し穴　６号落し穴　１号土壙　２号土壙　３号土壙　４号土壙
５号土壙　１号・２号溝　３号溝
図版７　遺物　１号～６号・８号住居出土遺物
図版８　遺物　８号・９号住居、１号土壙墓、遺構外出土遺物
図版９　遺物　遺構外出土土器
図版10　遺物　凹石・敲石・磨製石斧・打製石斧・砥石
図版11　遺物　磨石・台石・砥石

Ⅰ　発掘調査に至る経過

平成10年12月、鳥取県倉吉地方農林振興局（以下、農林振興局と言う）から、倉吉市下米積の主要地方道倉吉・赤碕・中山線（高城郵便局横）から下福田の市道国分寺・桜線（ＪＡ鳥取中央すいか選果場前）に至る全長約0.7㎞の農道新設及び拡幅の計画が提示され、埋蔵文化財有無についての踏査依頼があった。当該地は、11年度と同じく農林振興局から委託を受け県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業に伴い発掘調査を実施した、大沢遺跡群高峰・矢内谷峰遺跡（倉吉市国府）から約２㎞南に位置し、遺跡が密集する久米ヶ原丘陵を南北に貫くものであった。踏査を実施したところ、濃密な遺物散布が確認されたため試掘調査を平成11年12月に、国・県の補助を受けて実施した。[註1)] 試掘調査の結果、丘陵頂部で溝、丘陵頂部から南に広がる緩やかな斜面で土壙を確認し、遺跡の広がりが明らかとなった。

倉吉市教育委員会は農林振興局と協議を行い、開発範囲のうち畑地造成等の掘削を受けて遺構面が遺存しない部分を除いて発掘調査を実施した。発掘調査は倉吉市が鳥取県から委託を受け、倉吉市教育委員会文化課が主体となって実施した。発掘調査の場所は当初３箇所に分かれていた。１箇所目は、丘陵頂部から南斜面の標高約63～67mに位置する南北に長い道路拡張部分で、南北長さ約70m・最大東西幅約７m・面積400㎡である。２箇所目は、南北に延びる道路新設部分に直交して既存道路に接続する標高約55～57mの南斜面部分で、長さ約30m・最大幅約10m・面積200㎡である。３箇所目はごく緩やかな南斜面の標高約50～55mに位置する南北に長い道路新設部分で、長さ約80m・最大幅約10m・面積1,400㎡である。３箇所合わせた発掘調査面積は2,000㎡である。その後発掘の進捗に伴い、当初畑地造成等の掘削によって遺構が遺存していないと判断し調査範囲外とした部分、すなわち南北に延びる道路新設部分から既存道路に接続する標高約55～57mの南斜面にも遺構が遺存することが判明した。このため農林振興局と協議を行い、遺構が広がる500㎡を追加調査することになり、２つの箇所がつながって逆Ｌ字形の調査区となった。最終的な発掘調査は合計2,500㎡である。現地調査は平成12年６月１日から平成12年９月29日まで行った。

Ⅱ　位置と歴史的環境

船沖遺跡は、倉吉市街地から西方へ約６㎞の倉吉市下米積字船沖・下乳母ヶ谷、上米積字船沖に位置する。遺跡周辺は、中国地方の最高峰である大山（標高1,711m）の火山灰によって形成された、南西から北東方向になだらかな丘陵と浅い谷が交互に入り組む丘陵で、通称久米ヶ原と呼ばれる天神川支流の国府川中流域左岸の河岸段丘上にあたり、丘陵南側縁辺部の尾根南斜面と南に広がるなだらかな地形となる。標高は約50～67m、水田面との比高差は約７～24mで平野部をすぐ見下ろす位置にある。以下、遺跡分布図（第１図）を中心に遺跡の概要を述べる。

縄文時代の主な遺跡は市内で20箇所余り確認されている。その多くが落し穴を確認したものであり、丘陵の調査でしばしば確認される。中尾遺跡（84基）・長谷遺跡（57基）・横谷遺跡群（47基）などをはじめとして、頭根後谷遺跡・大仙峯遺跡・大山遺跡・イキス遺跡等、市内で200基を越え、落し穴が密集する地区である。その築造時期は不明確なものが多いが、30基については出土遺物・炭の年代測定から早期から晩期と推定されており、前期から後期にピークがある。住居址は取木遺跡・津田峰遺跡で確認している。

弥生時代の遺跡は、久米ヶ原丘陵を中心に集落が多く存在する。前期の集落址は未確認であるが、船沖遺跡で

土器が確認されているため、平地、微高地の調査が進捗することにより確認されると思われる。中期には、中峯遺跡(12)・遠藤谷峯遺跡(9)・後中尾遺跡(36)がある。後期になるとその数は増大する。主なものとして、中峯遺跡・遠藤谷峯遺跡・白市遺跡(11)・後中尾遺跡・服部遺跡・観音堂遺跡(25)・コザンコウ遺跡・夏谷遺跡・沢ベリ遺跡などがある。コザンコウ遺跡は竪穴式住居、掘立柱建物、貯蔵穴が1単位となり、3単位のまとまりが確認されている。弥生時代集落の多くは、古墳時代にも引き続き営まれる。墳墓は、前期の土壙墓であるイキス遺跡、後期の阿弥大寺四隅突出型墳丘墓(30)・大谷後ロ谷墳丘墓(13)・二夕子塚遺跡土壙墓群などがある。

倉吉市西郊の古墳時代前期の首長墓は、蓼鳳鏡、三角縁神獣鏡など豊富な遺物が出土した国分寺古墳（前方後方墳・全長60m）を初現とし、大谷大将塚古墳（前方後円墳・全長50m）、上神大将塚古墳（円墳・直径30m）がこれに続く。発掘された前期の古墳としては首長墓クラスではないが、二夕子塚遺跡の方墳群がある。古墳時代後期は服部古墳群・駄道東遺跡・頭根後谷遺跡・沢ベリ遺跡・イザ原古墳群などが調査されている。古墳時代終末期は、方墳、多角形墳のある両長谷遺跡、取木遺跡、一反半田遺跡がある。

奈良時代の官衙跡は、物資収納施設とみられる大型掘立柱建物群を確認した不入岡遺跡、伯耆国庁跡(16)がある。

寺院跡は、7世紀中頃に大御堂廃寺、7世紀後半に大原廃寺が建立される。8世紀前半は石塚廃寺、中頃には伯耆国分寺、法華寺畑遺跡（国分尼寺）が造られる。この頃、藤井谷廃寺も造られる。

奈良時代から平安時代の集落址は横田矢戸遺跡(23・24)・平ル林遺跡・西前遺跡・観音堂遺跡・大栄町向野遺跡などで、多くが7世紀後半から9世紀にかけての遺跡である。

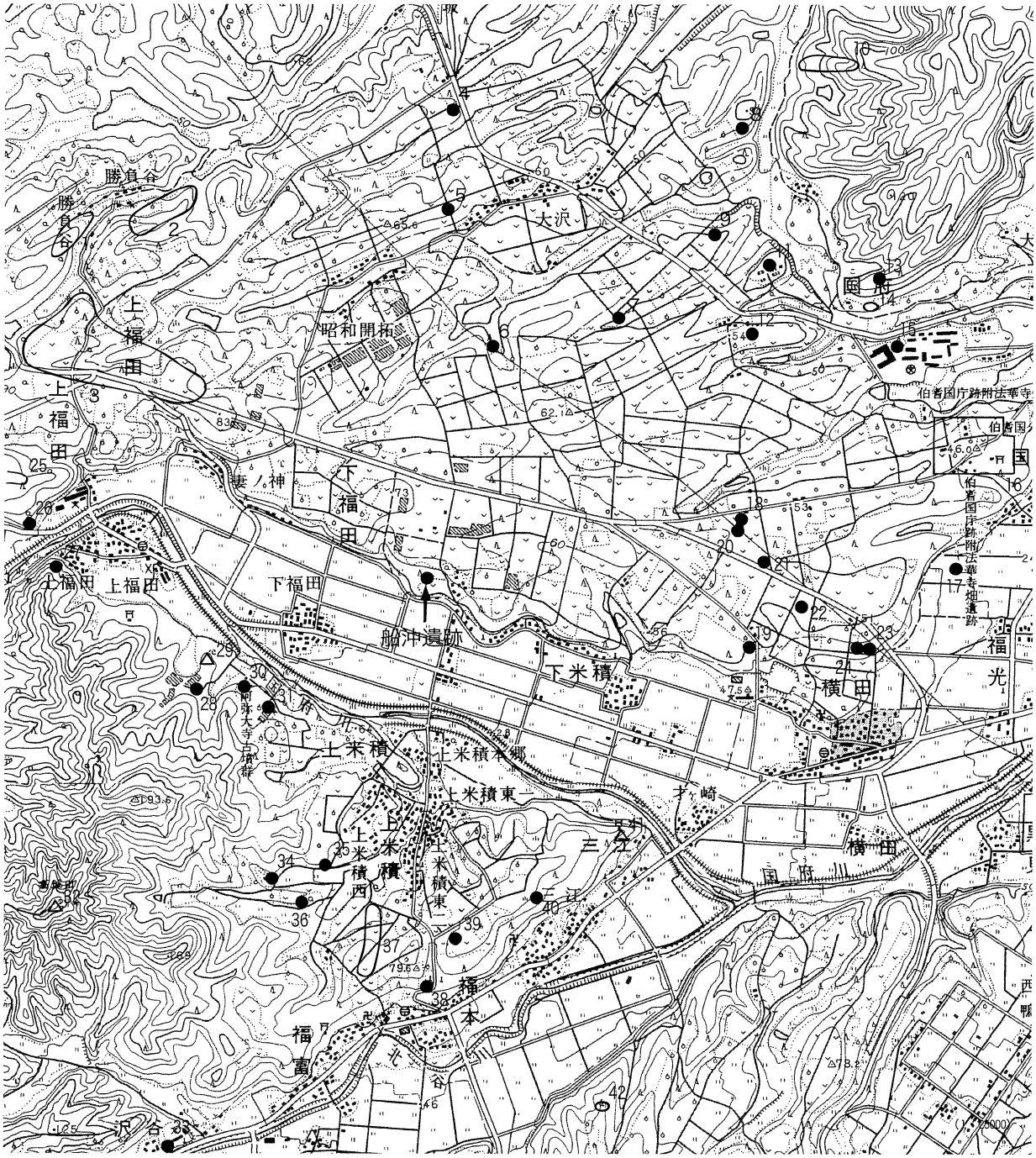
Ⅲ　調査の概要

発掘調査は、西から東に延びる丘陵を南北に貫く道路新設部分と道路拡張部分2,500㎡について実施した。基本層序は、上層から表土（黒褐色土）、黒褐色土、褐色土（ソフトローム土）、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂）で、調査区北端と南端は表土が浅く、表土下約20㎝から30㎝下で褐色土と黄灰色砂質土の混じった遺構検出面となるが、調査区中央部は表土（黒褐色土）、黒褐色土の堆積が約1m堆積しており、褐色土（ソフトローム土）が遺構検出面である。調査区の南端は攪乱を受けていたため遺構検出面が遺存していなかった。

調査の結果、竪穴式住居9棟、掘立柱建物11棟、段状遺構1、柵列5、墳墓1基、土壙墓2基、貯蔵穴2基、落し穴6基、土壙5基、溝4条を確認した。

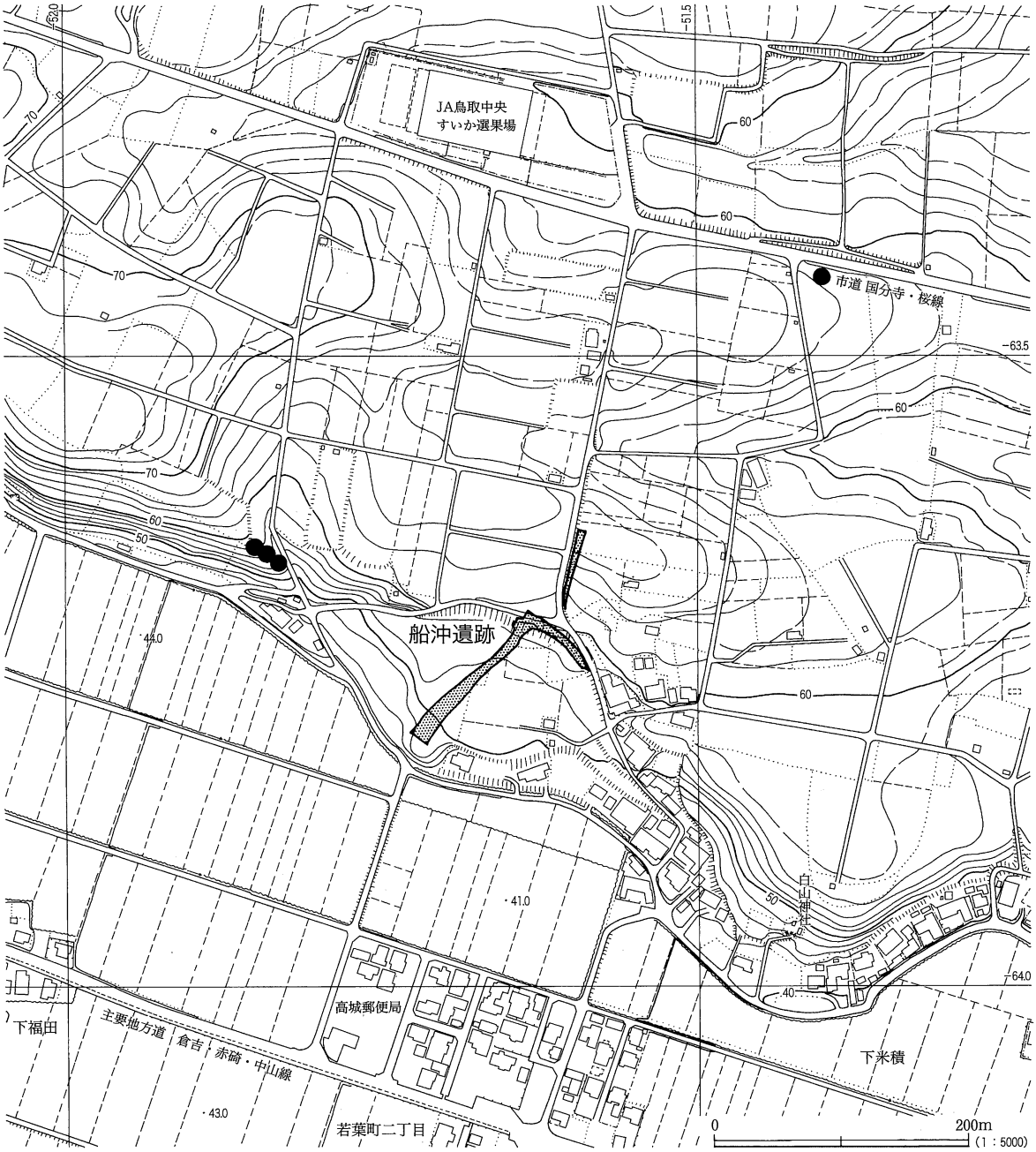
1　遺構

1号住居　調査区の南に位置する。住居の北東隅は一部調査区外となるがほぼ全体を確認した。平面形、主柱穴、土層断面により、C期→B期→A期の3時期の建て替えが考えられる。C期の床面規模は東西辺3.9m・南北辺3.84～4.0m、床面積15.2㎡で、検出面から床面までの深さは最大0.23mである。B期・A期の床面規模は東西辺3.68m、南北辺3.32mで、床面積は(12.2)㎡である。以下（　）は遺存値とする。平面形はC期が方形であるが、B期・A期については辺の方向がずれて南北規模が小さくなり、やや長方形となる。これに伴い、壁際中央ピットが東辺のP13から南辺P5に移動し、主柱穴は4本柱（P9～P12）から2本柱（P7・P8）となる。A期には、B期の主柱穴を埋めて再び4本柱（P1～P4）となる。壁際中央ピットは上段が浅い方形、下段が円形の二段掘りである。出土遺物は埋土中から土師器椀1が出土している。



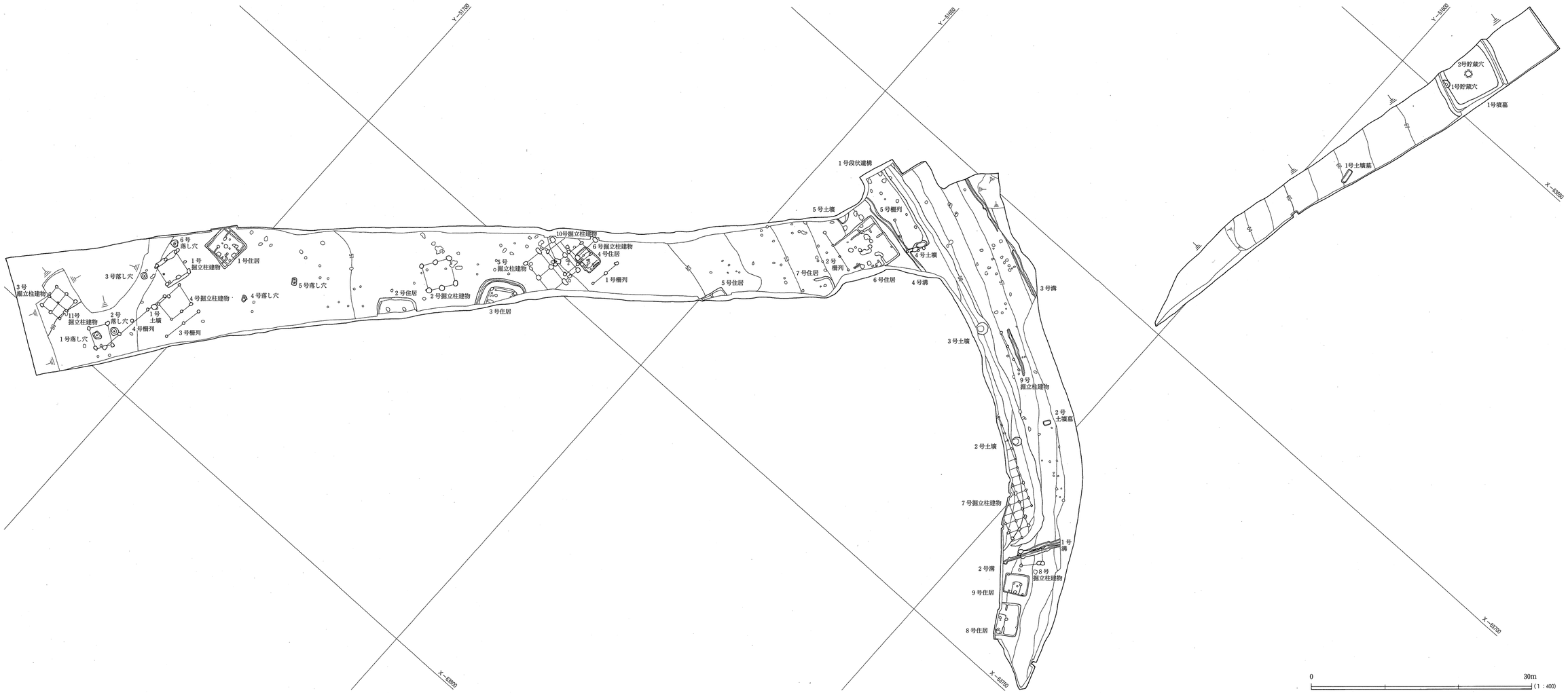
第１図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

1	勝負谷地域遺跡群	10	野田古墳群	19	福田寺遺跡２次	28	小谷遺跡	37	後ロ谷遺跡
2	ケンカ塚古墳群	11	白市遺跡	20	福田寺遺跡３次	29	下福田城跡	38	福本家ノ上古墓
3	稚児ヶ墓古墳群	12	中峯遺跡	21	東福田寺遺跡	30	阿弥大寺墳丘墓群	39	晩田遺跡
4	矢内谷峰遺跡	13	大谷後ロ谷墳丘墓	22	岩屋遺跡	31	下小垣遺跡	40	上野遺跡
5	高峰遺跡	14	白市窯跡	23	矢戸遺跡１次	32	高城城跡	41	三江城跡
6	大道谷遺跡	15	向野遺跡	24	矢戸遺跡２次	33	屋敷通遺跡	42	管ヶ谷口たたら
7	大沢前遺跡	16	伯耆国庁跡	25	観音堂遺跡	34	奥田遺跡		
8	両長谷遺跡	17	嶋ノ掛遺跡	26	観音堂１号墳	35	箕ヶ平遺跡		
9	遠藤谷峯遺跡	18	福田寺遺跡１次	27	上福田横穴群	36	後中尾遺跡		

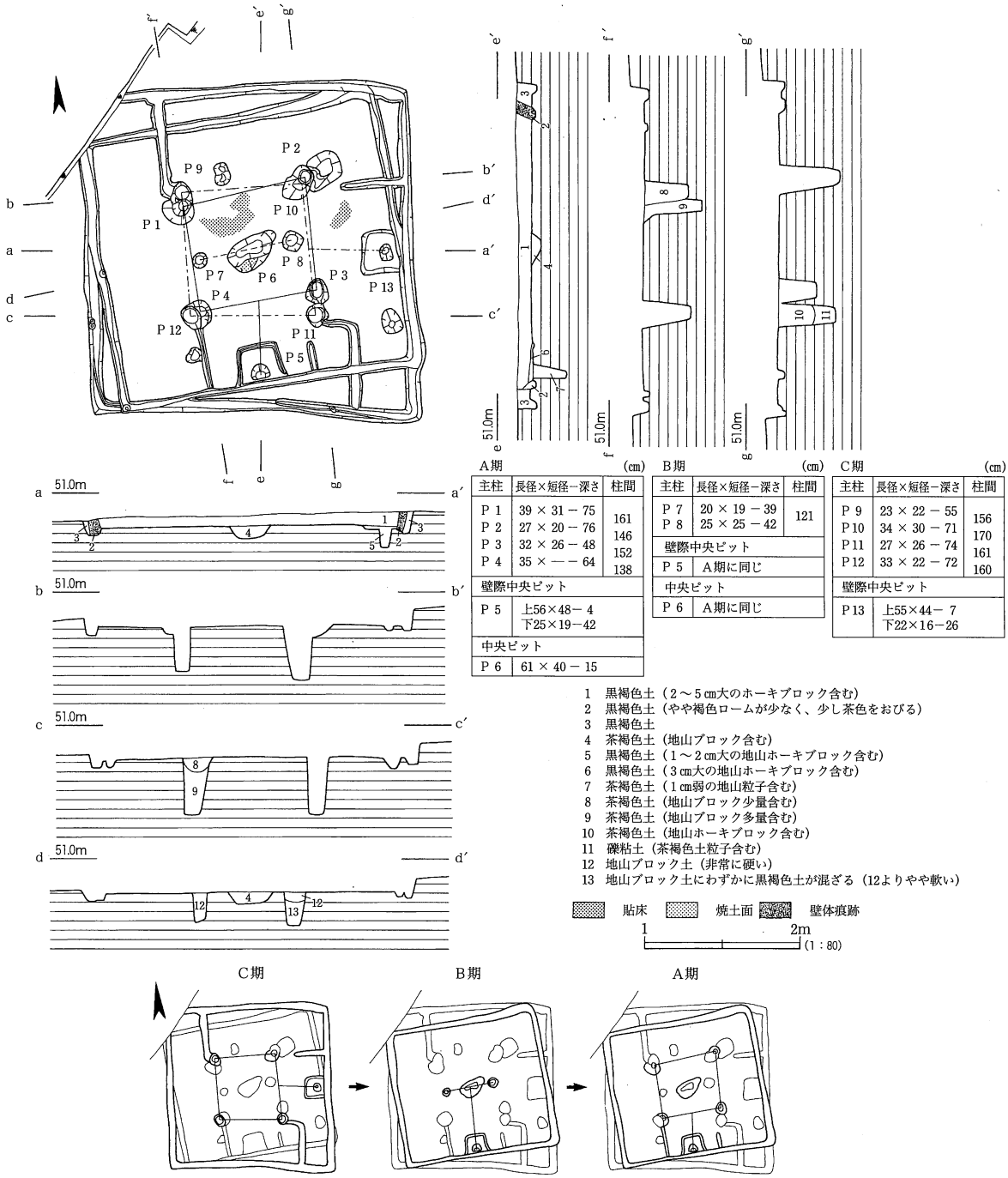


第２図　船沖遺跡調査区位置図

２号住居　調査区の南寄りに位置する。住居全体の約１/３を確認したにとどまり、東側は調査区外となる。平面形は隅丸方形と推定され、主柱穴を２本（Ｐ１・Ｐ２）確認したが、復元すると４本柱になるとみられる。周壁溝が２条巡るため、建て替えが推定されるが、土層断面観察では新旧関係は不明である。床面規模は外側周壁溝で南北辺(4.76)ｍ・東西辺(1.84)ｍ、内側周壁溝で南北辺(4.52)ｍ・東西辺(1.76)ｍ、検出面から床面までの深さは最大0.57ｍである。床面積は内側周壁溝で(6.9)㎡、外側周壁溝で(7.9)㎡である。Ｐ１の周辺には貼床が存在する。出土遺物は埋土中から土師器甕２・３が出土した。その他、埋土中から古墳時代前期の土師器を中心に出土した。



第３図　船沖遺跡遺構全体図



A期 (㎝)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	39 × 31 － 75	161
P 2	27 × 20 － 76	146
P 3	32 × 26 － 48	152
P 4	35 × ― － 64	138
壁際中央ピット		
P 5	上56×48－ 4 下25×19－42	
中央ピット		
P 6	61 × 40 － 15	

B期 (㎝)

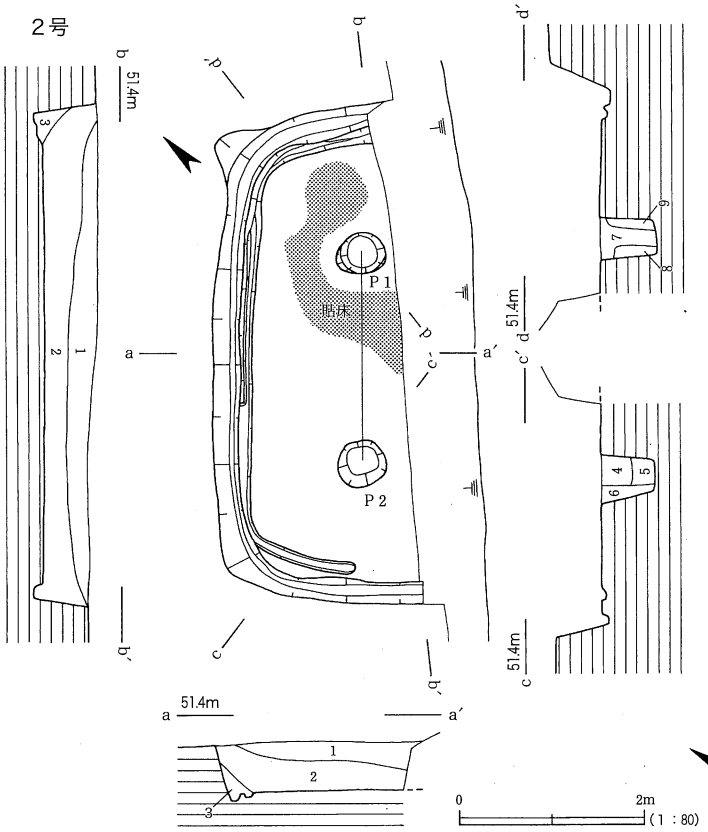
主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 7	20 × 19 － 39	121
P 8	25 × 25 － 42	
壁際中央ピット		
P 5	A期に同じ	
中央ピット		
P 6	A期に同じ	

C期 (㎝)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 9	23 × 22 － 55	156
P10	34 × 30 － 71	170
P11	27 × 26 － 74	161
P12	33 × 22 － 72	160
壁際中央ピット		
P13	上55×44－ 7 下22×16－26	

第４図　１号住居遺構図

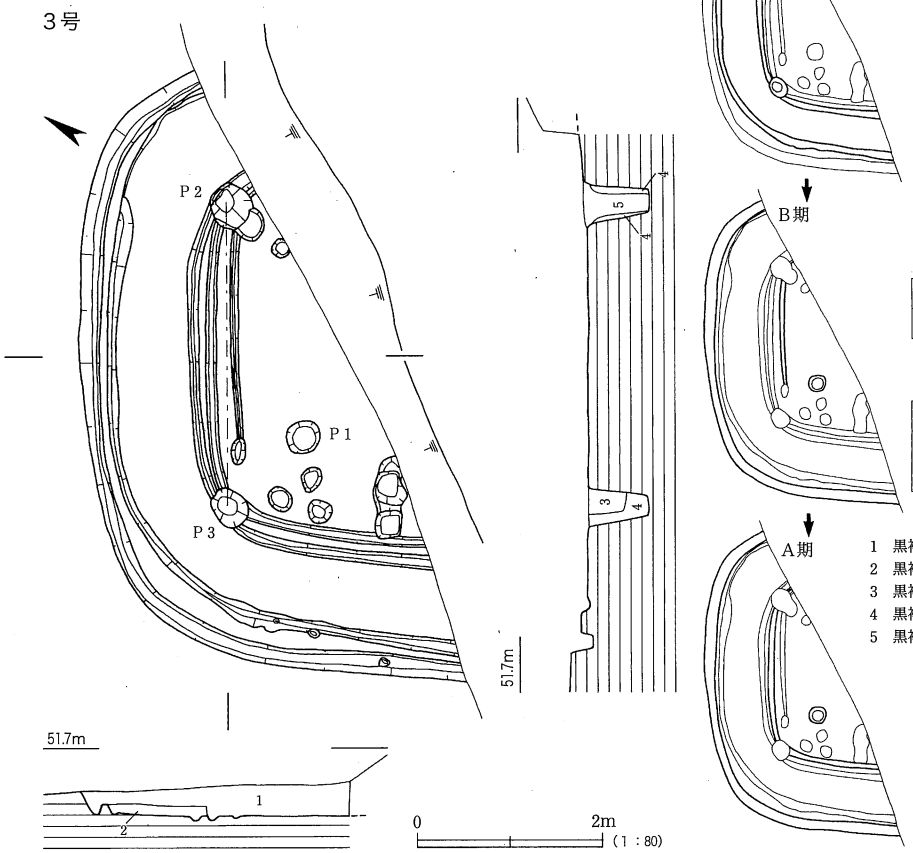
３号住居　調査区の南寄りに位置する。２号住居と同様全体の約１/３を確認したにとどまり、東側は調査区外となるが、平面形は隅丸方形とみられる。平面形、主柱穴、土層断面により、Ｃ期→Ｂ期→Ａ期の３時期の建て替えが考えられ、そのいずれの時期も周壁溝の内側にもう１条の溝を巡らして、ベッド状遺構をなしている。Ｃ期ベッド状遺構を含めた床面規模は東西辺(2.96)ｍ、南北辺(5.32)ｍ、床面積(12.3)㎡でベッド状遺構は幅約0.68～1.00ｍ、検出面から床面までの深さは最大0.26ｍである。Ｂ期のベッド状遺構を含めた床面規模は東西辺(3.16)ｍ、南北辺(5.40)ｍ、床面積14.4㎡でベッド状遺構は幅約1.20～1.36ｍである。Ａ期のベッド状遺構を含めた床面規模は東西辺(3.16)ｍ、南北辺(5.40)ｍ、床面積14.4㎡でベッド状遺構は幅約1.20～1.36ｍで床面から0.11ｍ高く



(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	55 × 44 － 62	226
P 2	54 × 48 － 59	

1 黒褐色土（地山ブロック少量含む）
2 黒褐色土（地山ブロック多量含む）
3 暗茶褐色土（しまりが悪い）
4 黒褐色土（地山ブロック粒子含む）
5 暗褐色土（地山ブロック粒子多量に含む）
6 ホーキ・ATの混じり土（しまりが悪い）
7 茶褐色土（地山1cm大ブロック含む）
8 礫粘土とホーキの混じり土
9 茶褐色土（AT・ホーキブロック多量に含む）



A期・B期 (cm)

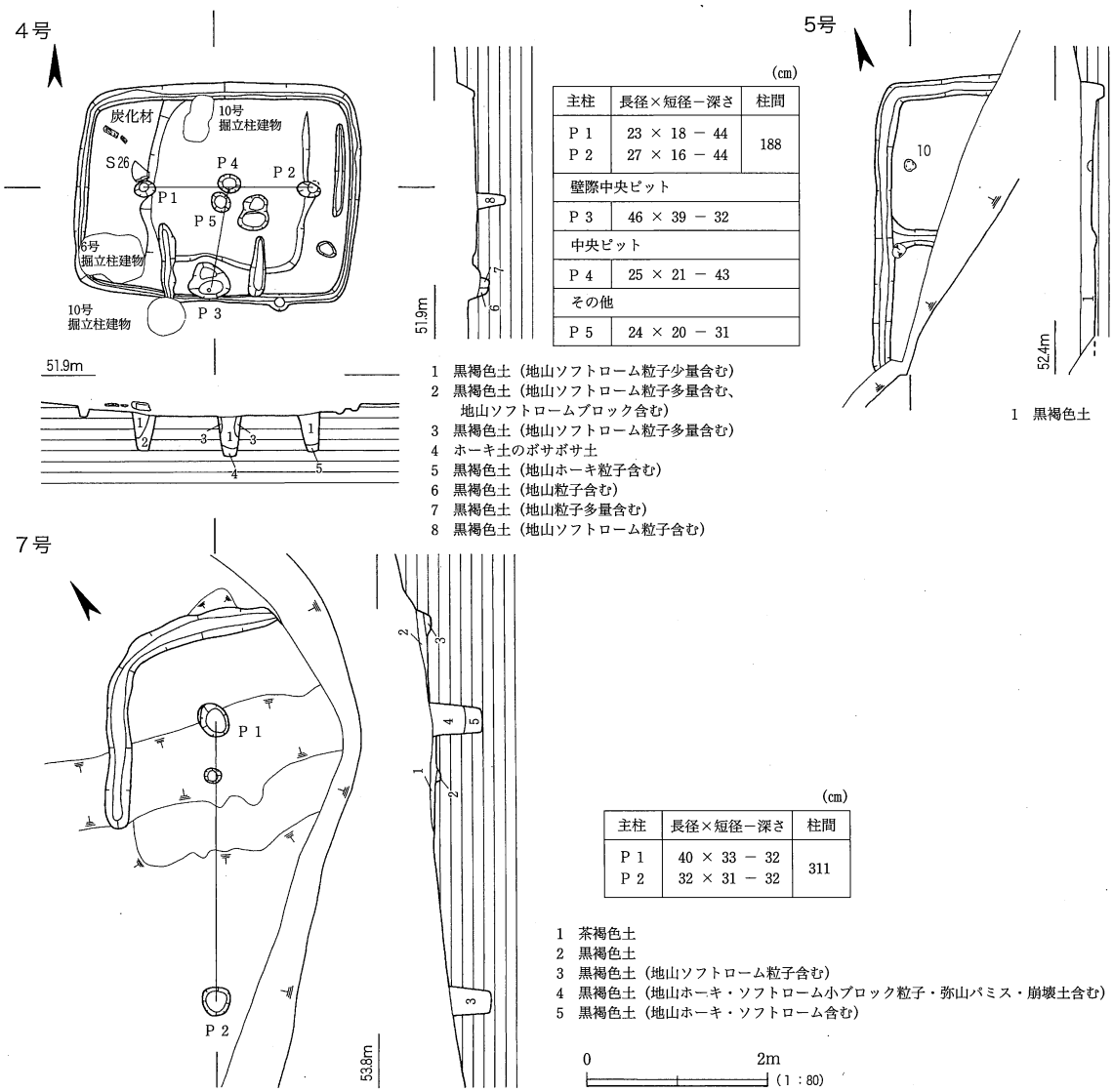
主柱	長径×短径－深さ
P 1	37 × 35 － 51

C期 (cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 2	45 × 40 － 71	331
P 3	44 × 35 － 65	

1 黒褐色土（地山粒子含む）
2 黒褐色土（地山粒子・ブロック多く含む）
3 黒褐色土
4 黒褐色土（地山ホーキブロック多く含む）
5 黒褐色土（地山ホーキブロック含む）

第5図　2号・3号住居遺構図



第６図　４号・５号・７号住居遺構図

なることが断面図によって分かる。主柱穴はＰ２・Ｐ３がＣ期に伴い、Ｐ１がＢ期・Ａ期に伴うとみられる。遺物は、埋土中から土師器甕４～７・鼓形器台８が出土している。

４号住居　調査区のほぼ中央に位置する。平面形は東西に長い隅丸長方形である。床面規模は、東西辺2.88m、南北辺2.16mで、検出面から床面までの深さは最大0.22mである。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２本柱でその内側は正方形に約0.04m低くなり、中央ピットＰ４と南辺中央に壁際中央ピットＰ３が存在する。Ｐ４に隣接してＰ５があり、東辺周壁溝の内側にも辺に並行して溝があるため建て替えの可能性がある。遺物はＰ１に接して台石Ｓ26が、北東隅で炭化材が出土した。また、埋土中から土師器甕９が出土した。

５号住居　調査区の中央に位置する。平面形は、大半が調査区外になるため全容は不明であるが、方形になると推定される。確認できた規模は南北辺(3.08)ｍ、東西辺(0.92)ｍ、検出面から床面までの深さは最大0.18m、床面積は(1.5)㎡である。主柱穴は調査区内では確認できなかった。西辺中央付近の周壁溝から直角に溝が延びる。遺物は、床面で土師器埦10が底部が上になった状態で出土した。

６号住居　調査区の中央に位置する。平面形は南辺の周壁溝が未検出であるが方形であるとみられる。平面形、主柱穴、土層断面により、Ｂ期→Ａ期の建て替えが考えられる。Ｂ期の床面規模は、東西辺5.40m、南北辺

(4.72)m、床面積(23.4)㎡、主柱穴はＰ８～Ｐ11で中央ピットがＰ13、方形で２段掘りの壁際中央ピットがＰ12、検出面から床面までの深さは最大0.87mである。Ａ期の床面規模は東西辺6.20m、南北辺(6.24)m、床面積(35.6)㎡、主柱穴はＰ１～Ｐ４、中央ピットがＰ７、壁際中央ピットがＰ６である。Ｐ５は長方形の掘り方で、壁際中央ピットＰ６の中軸線上にあり、Ｐ６と関連する可能性がある。遺物は、埋土中から土師器壺11、高坏12・13が出土した。その他埋土中から、風字硯39や土師器（平安時代）、緑釉陶器片、黒色土器片が出土した。

７号住居　調査区の中央に位置する。大半が調査区外となっており、且つ斜面の低い方側には、褐色土まで住居が掘り込まれていない。平面形はやや丸みのある角の部分があるため、多角形または隅丸方形・隅丸長方形とみられる。検出面から床面までの深さは最大0.21mである。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２本を確認したにとどまる。遺物は出土していない。

８号住居　調査区の東隅に位置する。平面形は南西側が調査区外となっているが、復元すると長方形と推定される。床面規模は南北辺4.16m、東西辺(2.80)m、床面積(10.8)㎡で、東西辺は復元すると約4.7mとなる。検出面から床面までの深さは最大0.70mである。主柱穴はＰ１を確認しており、２本柱が想定される。南辺には壁際中央ピットＰ３があり、長方形で２段掘りとなる。Ｐ２は長方形の掘り方で、壁際中央ピットＰ３の中軸線上にあり、Ｐ３と関連する可能性がある。住居中央から壁際中央ピットのある南辺は、床面が長さ2.6m×幅(1.0)mの長方形に0.03～0.06mの浅い掘り込みがある。掘り込み内側の中央ピットＰ４周辺は焼土面が広がる。遺物は床面から土師器甕18、壁際中央ピットＰ２埋土中から土師器甕15、埋土中から土師器壺14、甕15・16、高坏19、北東隅床面から敲石Ｓ２が出土した。

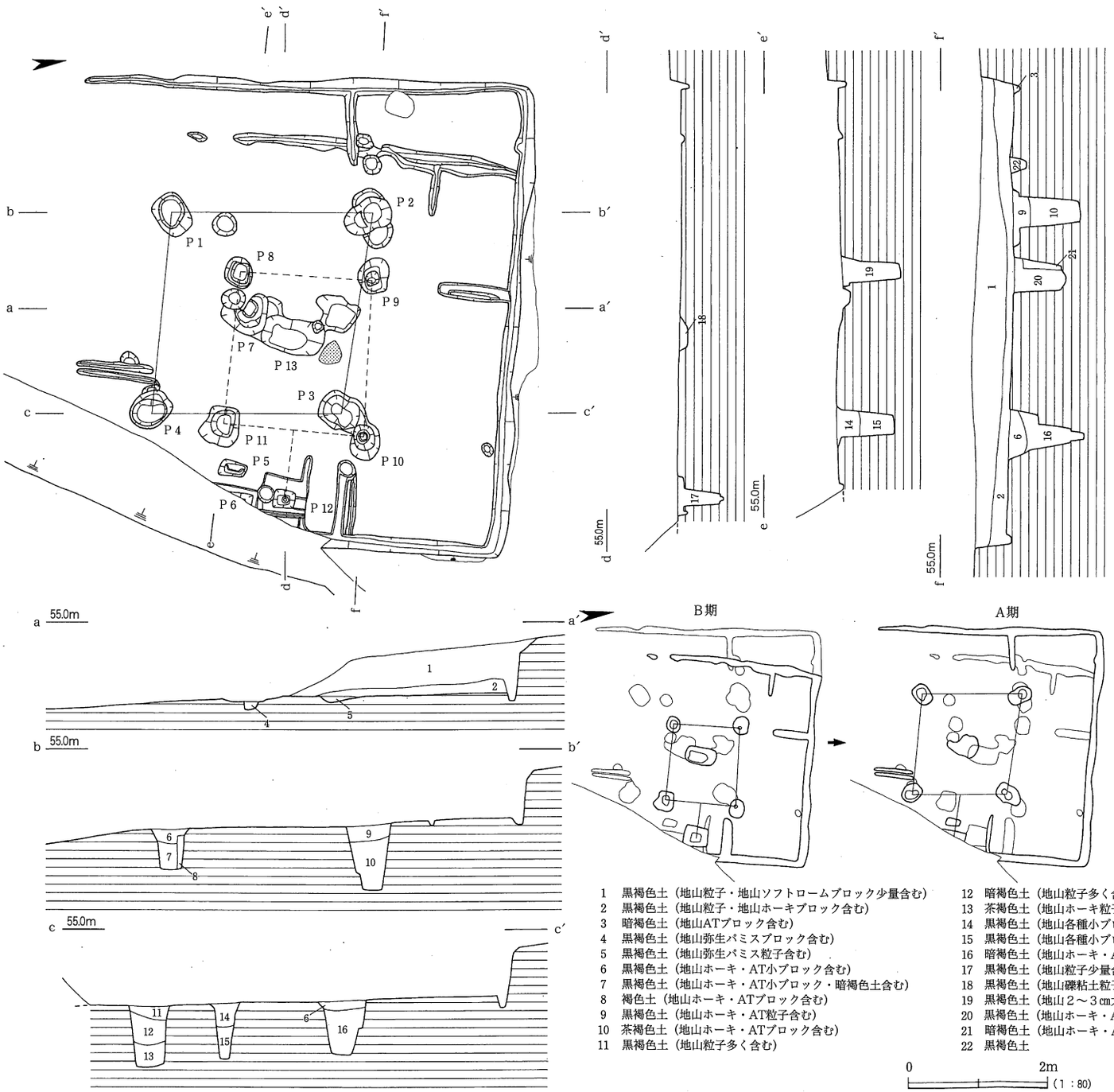
９号住居　調査区の北東隅に位置し、８号住居に隣接する。平面形はやや台形気味であるが、南西に長い長方形になる。床面規模は東西辺3.06m、南北辺2.24～2.57m、床面積7.4㎡、検出面から床面までの深さは最大0.70mで貼り床が存在する。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２本柱でＰ６が中央ピットである。主柱穴から南辺にある円形の壁際中央ピットＰ５にかけて、長方形の長さ1.62m×幅1.08m、深さ0.04～0.08mの掘り込みがある。遺物は床面から土師器小型丸底壺20、壁際中央ピットＰ５埋土中から砥石Ｓ43、埋土中から土師器高坏21～23が出土した。

１号掘立柱建物　調査区の南端近くに位置し４号掘立柱建物に隣接する。主軸はＮ－14°－Ｅで、桁行２間×梁行２間の建物である。棟持柱は他の柱穴に比べ浅く北に柱がずれ、柱間がまちまちである。建て替えが、平面形、土層断面から確認された。建て替え前は桁側全体を幅約0.38～0.79m、深さ約0.07～0.26m布掘りした後に、柱部分をさらに掘り下げる。建て替え後は東側の桁を西に寄せて規模を縮小し、西側の桁はほぼ同じ場所で若干北に位置をずらしている。床面積は建て替え前が11.0㎡、建て替え後が10.0㎡である。桁行の長さを梁行の長さで割った長方形度（以下、長方形度と言う）は、建て替え前が1.02、建て替え後が1.13である。遺物は、ピットの埋土中から縄文時代晩期の粗製土器片、弥生時代前期の土器片２点、土師器とみられる小片が出土した。

２号掘立柱建物　調査区やや南寄りの２号住居と３号住居の間に位置する。主軸はＮ－31°－Ｅで、桁行２間×梁行１間の建物である。東隅柱穴は２段の掘り方で、下段掘り方は柱を据えたとも考えられる。床面積は13.9㎡、長方形度は1.10である。遺物はピット埋土中から土師器鼓形器台片や土師器小片が出土した。

３号掘立柱建物　調査区の南端に位置する。主軸はＮ－２°－Ｗで、桁行２間×梁行２間の総柱建物である。柱穴規模は直径約0.14～0.23m・深さ約0.13～0.46mで四隅の柱が深く、その他は浅い。床面積は10.1㎡、長方形度は1.03である。遺物は、ピット埋土中から弥生時代後期の土器片、土師器の小片が出土した。

４号掘立柱建物　調査区の南端近く、１号掘立柱建物のすぐ東側に位置する。桁行２間×梁行１間の建物である。主軸は東側桁行Ｎ－９°－Ｅで、西側桁行Ｎ－５°－Ｅとずれる。床面積は10.6㎡、長方形度は1.28である。



A期 (cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1	60 × 47 － 58	288
P 2	69 × 46 － 96	289
P 3	73 × 51 － 78	271
P 4	62 × 53 － 89	287
補助柱		
P 5	38 × 20 － 6	
壁際中央ピット		
P 6	——	
中央ピット		
P 7	87 × 62 － 16	

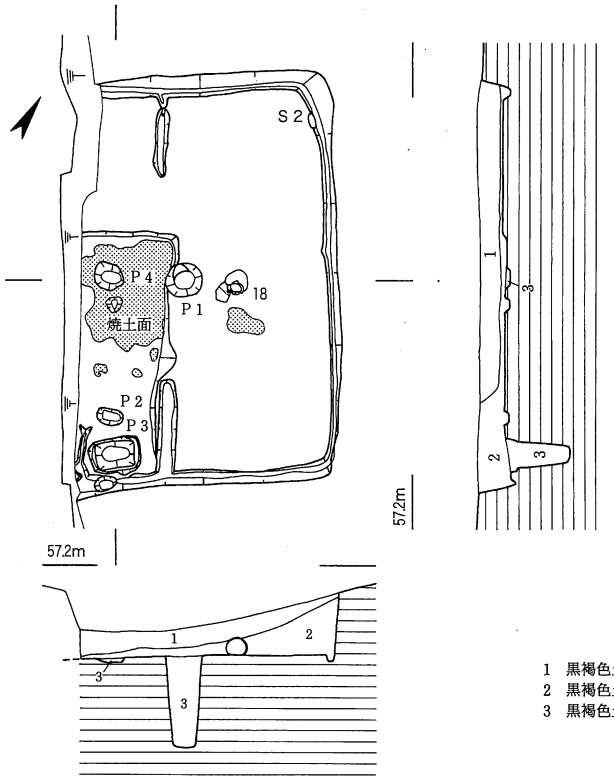
B期 (cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 8	41 × 39 － 89	188
P 9	50 × 43 － 77	222
P10	53 × 41 － 91	201
P11	56 × 43 － 82	217
壁際中央ピット		
P12	上71 × 55 － 9 下31 × 25 － 58	
中央ピット		
P13	88 × 50 － 12	

1 黒褐色土（地山粒子・地山ソフトロームブロック少量含む）
2 黒褐色土（地山粒子・地山ホーキブロック含む）
3 暗褐色土（地山ATブロック含む）
4 黒褐色土（地山弥生パミスブロック含む）
5 黒褐色土（地山弥生パミス粒子含む）
6 黒褐色土（地山ホーキ・AT小ブロック含む）
7 黒褐色土（地山ホーキ・AT小ブロック・暗褐色土含む）
8 褐色土（地山ホーキ・ATブロック含む）
9 黒褐色土（地山ホーキ・AT粒子含む）
10 茶褐色土（地山ホーキ・ATブロック含む）
11 黒褐色土（地山粒子多く含む）
12 暗褐色土（地山粒子多く含む）
13 茶褐色土（地山ホーキ粒子多く含む）
14 黒褐色土（地山各種小ブロック含む）
15 黒褐色土（地山各種小ブロック少量含む）
16 暗褐色土（地山ホーキ・ATブロック粒子含む）
17 黒褐色土（地山粒子少量含む）
18 黒褐色土（地山礫粘土粒子含む）
19 黒褐色土（地山２～３㎝大ホーキブロック含む）
20 黒褐色土（地山ホーキ・ATブロック粒子含む）
21 暗褐色土（地山ホーキ・AT礫粘土ブロック粒子多く含む）
22 黒褐色土

第７図　６号住居遺構図

8号

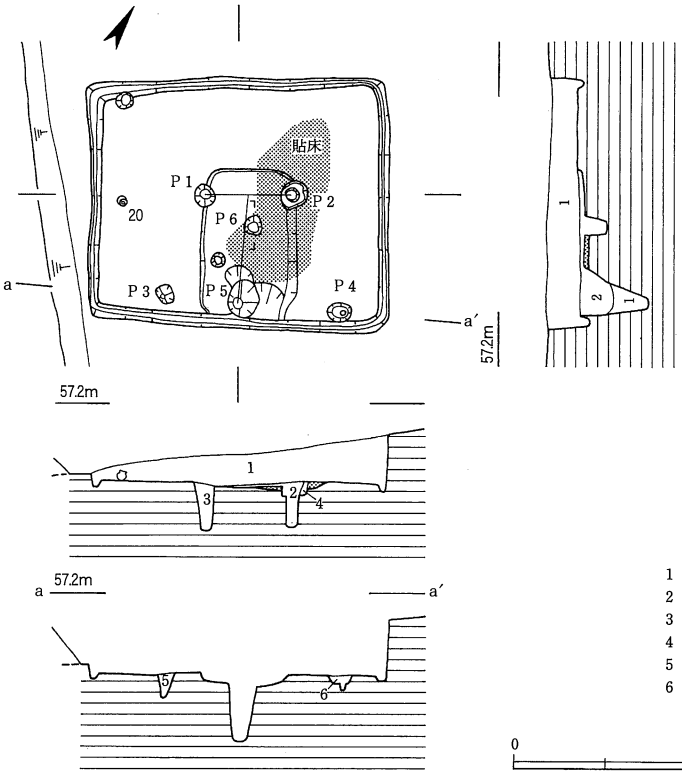


(cm)

主柱	長径×短径－深さ
P 1	42 × 37 － 101
補助柱	
P 2	39 × 24 － 5
壁際中央ピット	
P 3	上54 × 37 － 8 下42 × 31 － 66
中央ピット	
P 4	32 × 31 － 5

1　黒褐色土（地山ホーキ・AT大ブロック多く含む）
2　黒褐色土（地山粒子含む）
3　黒褐色土（地山ホーキ小ブロック含む）

9号



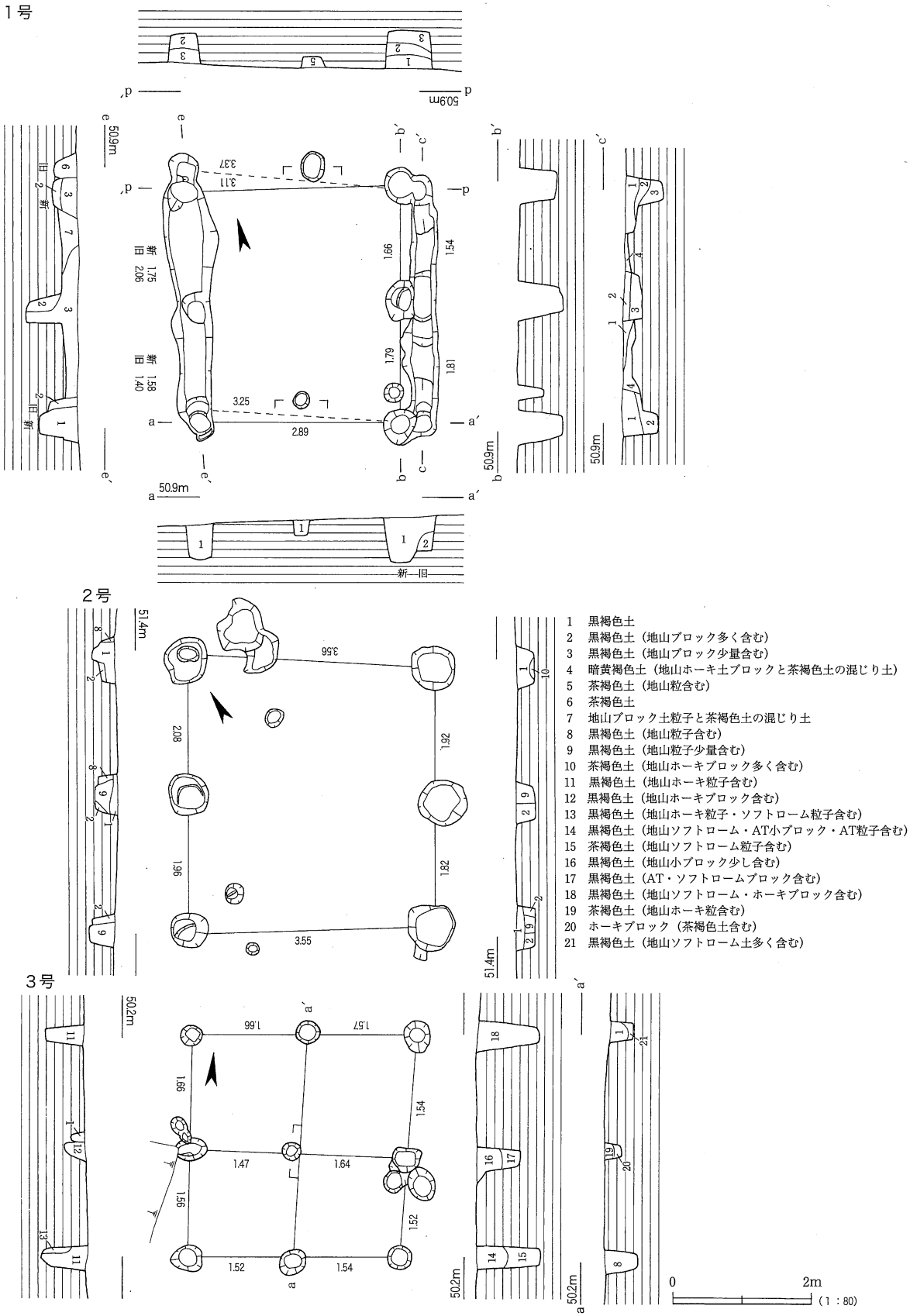
(cm)

主柱	長径×短径－深さ	柱間
P 1 P 2	24 × 21 － 53 上30 × 27 － 11 下16 × 14 － 35	94
補助柱		
P 3 P 4	20 × 17 － 28 26 × 21 － 16	
壁際中央ピット		
P 5	39 × 31 － 64	
中央ピット		
P 6	21 × 18 － 23	

1　黒褐色土（地山粒子・ブロック含む）
2　黒褐色土
3　黒褐色土（地山小ブロック含む）
4　茶褐色土
5　黒褐色土（地山粒子含む、地山ブロック少量含む）
6　黒褐色土（地山2～3㎝大ブロック多く含む）

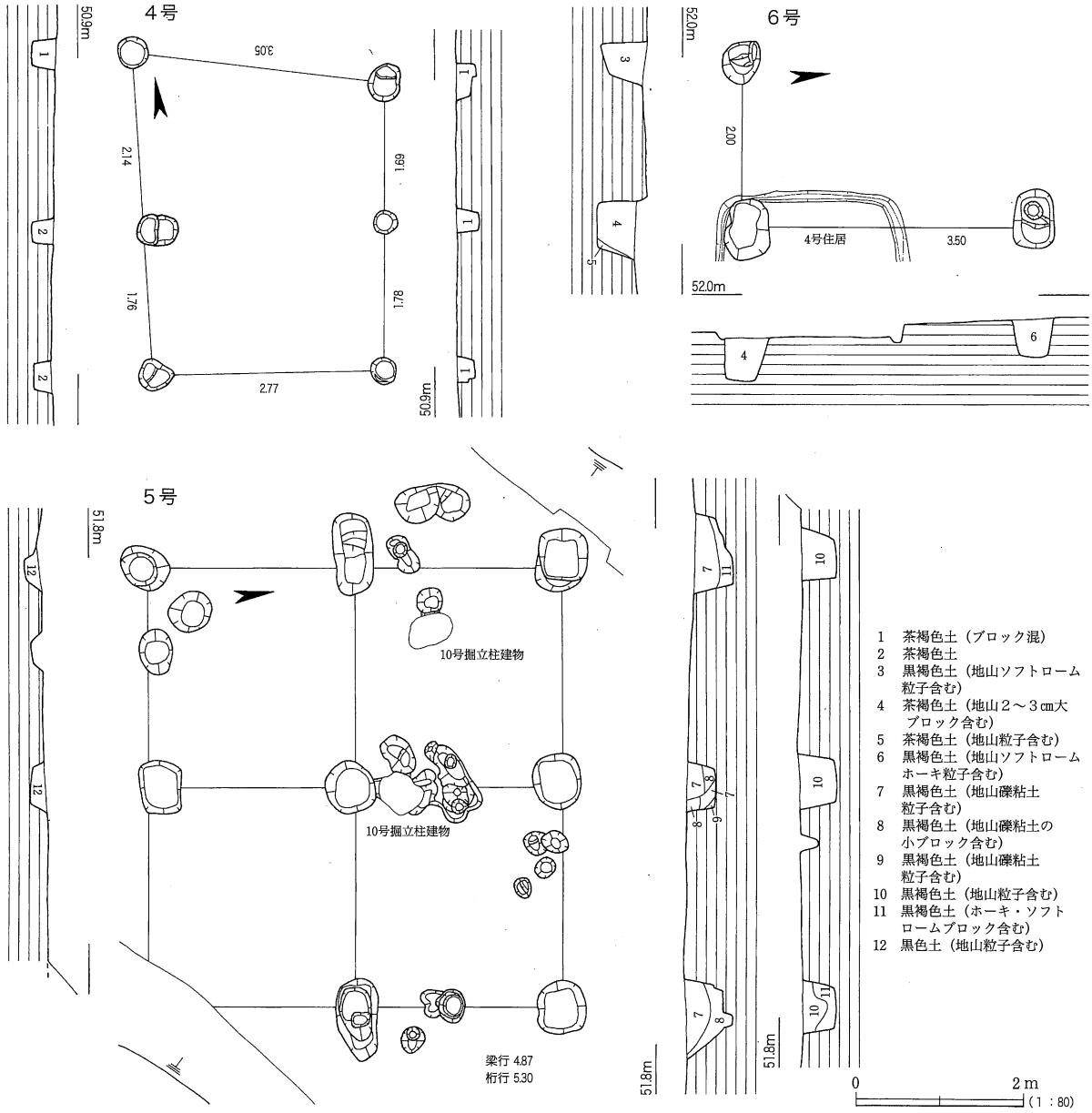
0　2m
（1：80）

第8図　8号・9号住居遺構図



1　黒褐色土
2　黒褐色土（地山ブロック多く含む）
3　黒褐色土（地山ブロック少量含む）
4　暗黄褐色土（地山ホーキ土ブロックと茶褐色土の混じり土）
5　茶褐色土（地山粒含む）
6　茶褐色土
7　地山ブロック土粒子と茶褐色土の混じり土
8　黒褐色土（地山粒子含む）
9　黒褐色土（地山粒子少量含む）
10　茶褐色土（地山ホーキブロック多く含む）
11　黒褐色土（地山ホーキ粒子含む）
12　黒褐色土（地山ホーキブロック含む）
13　黒褐色土（地山ホーキ粒子・ソフトローム粒子含む）
14　黒褐色土（地山ソフトローム・AT小ブロック・AT粒子含む）
15　茶褐色土（地山ソフトローム粒子含む）
16　黒褐色土（地山小ブロック少し含む）
17　黒褐色土（AT・ソフトロームブロック含む）
18　黒褐色土（地山ソフトローム・ホーキブロック含む）
19　茶褐色土（地山ホーキ粒含む）
20　ホーキブロック（茶褐色土含む）
21　黒褐色土（地山ソフトローム土多く含む）

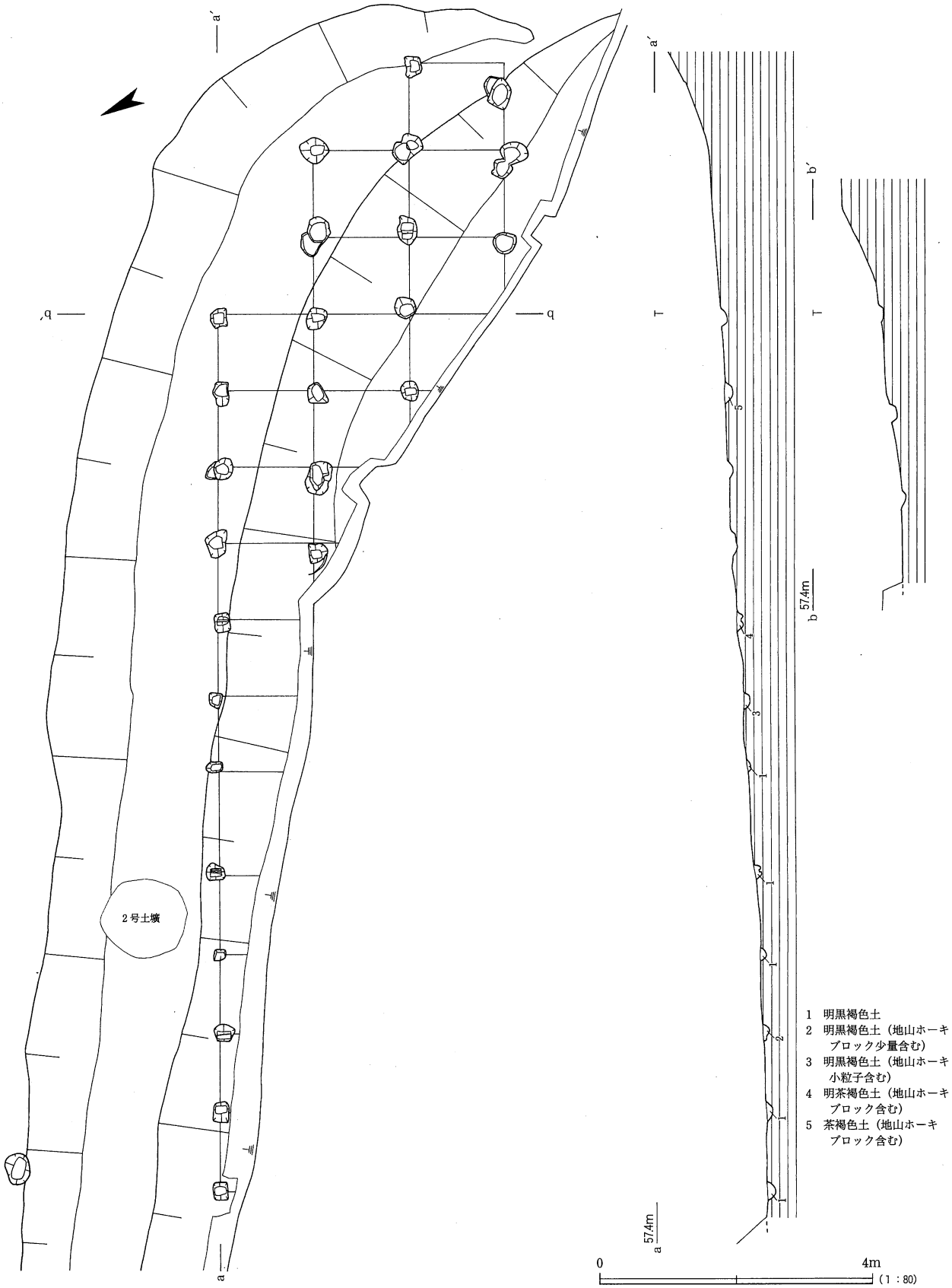
第９図　１号～３号掘立柱建物遺構図



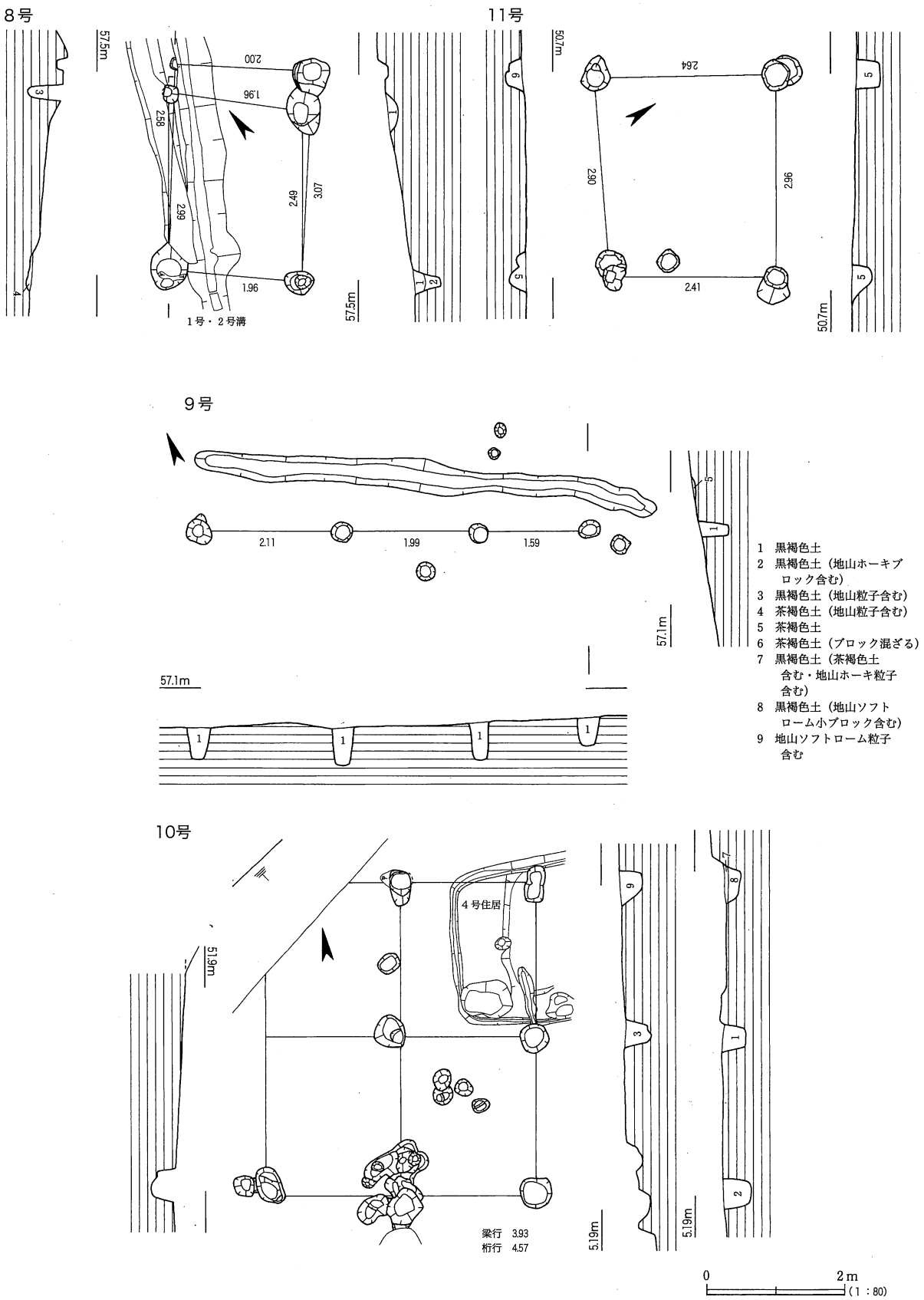
第10図　4号～6号掘立柱建物遺構図

5号掘立柱建物　調査区のほぼ中央、3号住居と4号住居の間で10号掘立柱建物と重複し、南東隅の柱は調査区外となる。主軸はN－8°－Eで、桁行2間×梁行2間の総柱建物である。床面積は(26.0)㎡、長方形度は1.06である。遺物は、ピット埋土中から弥生時代前期の土器片、土師器甕・高坏・器台・低脚坏脚部のいずれも小片が出土した。

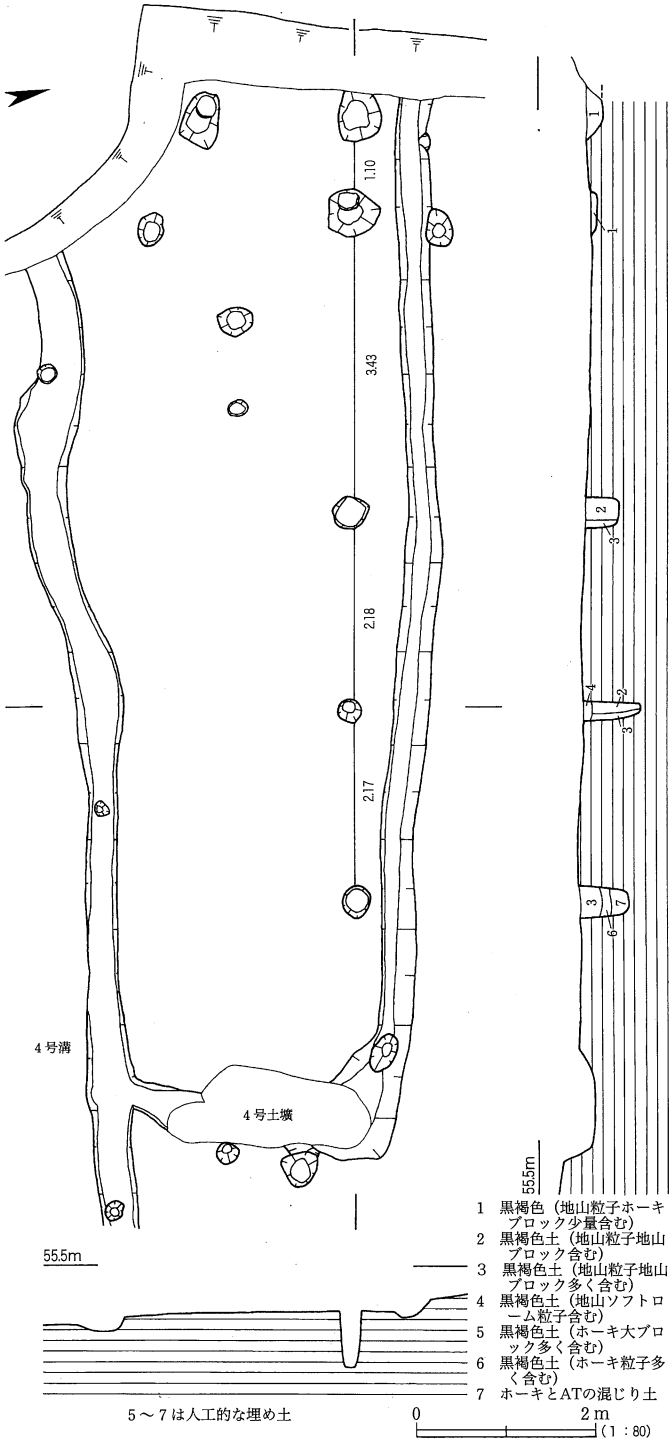
6号掘立柱建物　調査区のほぼ中央、5号掘立柱建物の北辺から約1m北に位置する。北側が調査区外となり東西1間、南北1間分の柱穴3つを確認しているだけである。南東隅の柱は4号住居と切り合っており、住居の床面で貼り床面や硬化面がないため掘立柱建物の方が新しいと見られる。南北のピット方向はN－4°－Eで、東側2つの穴の平面形は東西に長く、南東の柱穴底面はやや瓢箪形になる。遺物はピット埋土中から二重口縁の土師器甕小片が3点出土した。



第11図　7号掘立柱建物遺構図



第12図　8号～11号掘立柱建物遺構図



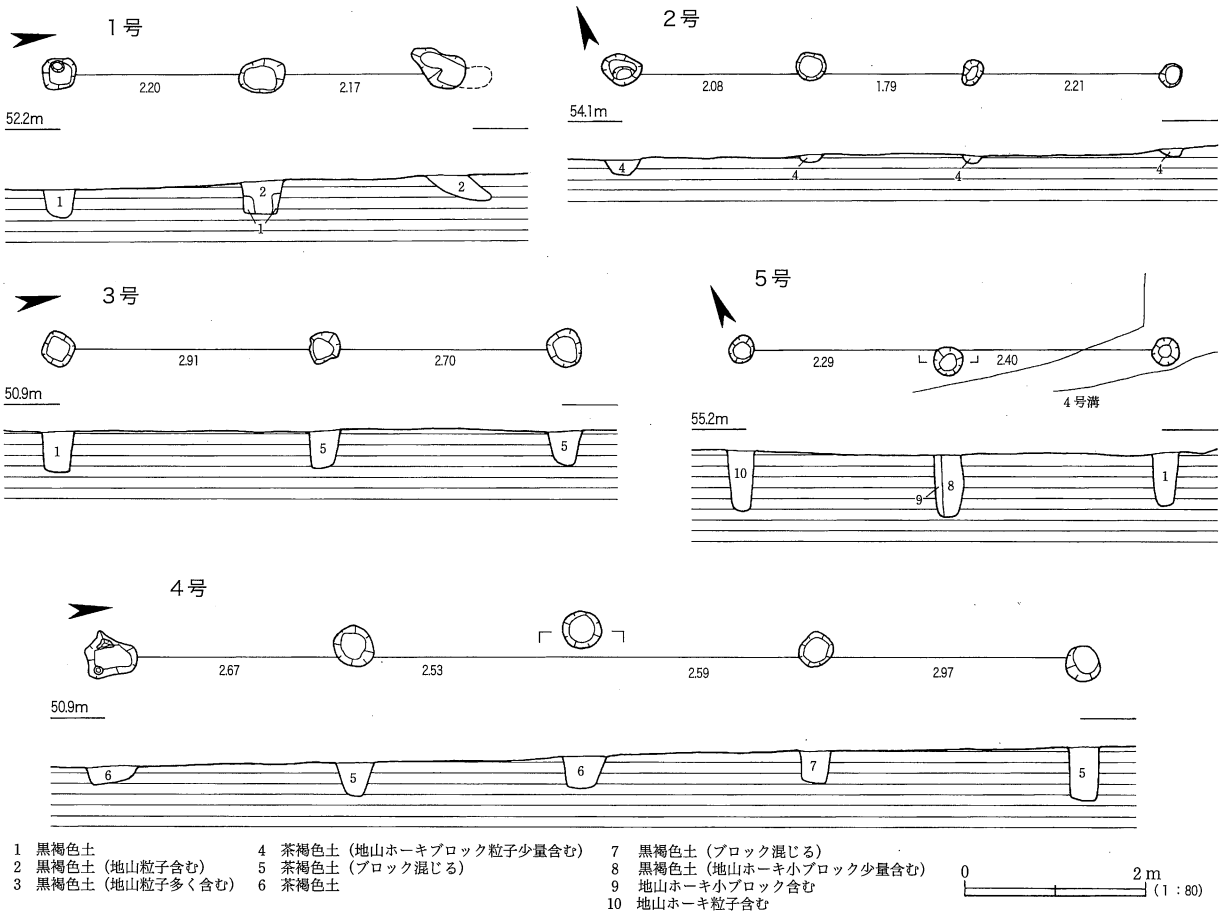
第13図　1号段状遺構遺構図

7号掘立柱建物　調査区の北東、南斜面に位置する。全体規模は南側が調査区外のため不明であるが、東西方向に14間(16.5m)、南北3間分(4.2m)と長大である。床面積は(24.0)㎡である。東端は北側の2間分が無く、その西側2間は北側1間分が無い。柱間は東西方向が場所によって異なり約1.1m～1.5mであるのに対し、南北は約1.4mと均一である。柱穴規模は0.3～0.4mで、深さが最大で約0.1mと浅い。建物北側は斜面の高い側を削った段差が続き、建物東端で斜面の低い側に回って終わる。したがって斜面造成後に掘立柱建物を建てたとも考えられるが、西側には削った段差が回らない。遺物は全く出土しなかった。

8号掘立柱建物　調査区北東の南斜面、7号掘立柱建物の東に位置する。桁行1間×梁行1間の建物で、平面形から南側梁行は同じ位置で北側梁行を建て替える。南側建物が主軸はN－42°－E、長方形度は1.26で北側建物の主軸がN－39°－E、床面積は5.2㎡と6.0㎡、長方形度は1.52である。建物の新旧関係は不明である。遺物はピット埋土中から須恵器甕の体部片と土師器低脚坏の脚部片が出土した。

9号掘立柱建物　調査区中央の斜面に位置する。桁行の北側3間分を確認したが、梁行は南側斜面の低い側については遺構検出面まで掘り込まれていないためか確認できなかった。桁行の北側に柱穴にほぼ並行して、雨落ち溝とみられる長さ約6.8m・幅約0.4mの浅い溝が走る。主軸はN－68°－Wである。遺物は出土しなかった。

10号掘立柱建物　調査区のほぼ中央に位置し、5号掘立柱建物と重複し、北西隅の柱は調査区外になる。北東隅の柱は4号住居と切り合っており、住居の床面で貼り床面や硬化面がないため掘立柱建物の方が新しいと見られる。主軸はN－9°－E、床面積は(17.1)㎡である。桁行2間×梁行2間の総柱建物である。長方形度は1.16である。遺物は出土しなかった。



第14図　1号～5号柵列遺構図

11号掘立柱建物　調査区の南端に位置する。桁行1間×梁行1間の建物である。主軸はN－32°－Eである。床面積は7.4㎡、長方形度は1.15である。遺物は出土しなかった。

1号段状遺構　調査区中央の斜面、6号住居のすぐ北に位置する。斜面の高い側を削り、幅約0.4mの浅い溝を北と東に設け、平坦地を区画する。平坦地は東西方向の溝に並行してピットが直線的に5つ並ぶ。ピットは東側の3つが等間隔で西側の2つとは合わないが平坦地が調査区外まで延びるためどのように展開するかは分からない。南側は4号溝と切り合うが新旧関係は不明である。遺物は埋土中から土師器片、須恵器片が出土した。

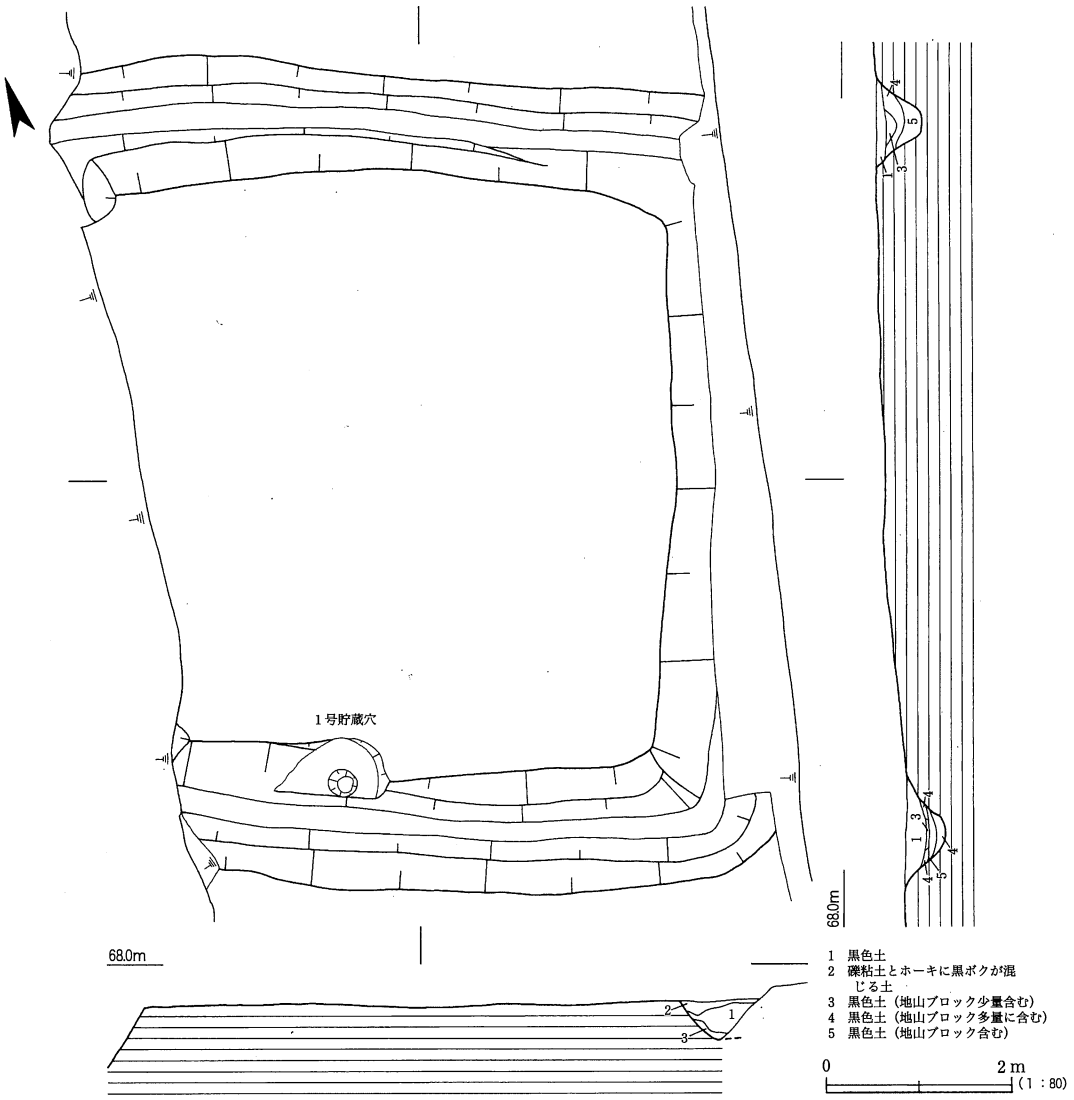
1号柵列　調査区のほぼ中央、4号住居の東側に位置する。主軸の方向はN－8°－Eで、中央のピットは柱痕跡が断面から確認され、北端のピットは北側に抉れる。遺物はピット埋土中から土師器（古墳時代）の小片が出土した。

2号柵列　調査区中央、6号住居の南に接して位置する。主軸の方向はN－69°－Wで、ピットの深さは0.1m程で浅い。遺物は出土しなかった。

3号柵列　調査区の南、4号掘立柱建物の主軸とほぼ並行して東約1.5mに位置する。主軸の方向はN－11°－Eである。遺物は出土しなかった。

4号柵列　調査区の南に位置し、4号溝と切り合うが新旧関係は不明である。主軸方向はN－65°－Wである。遺物は出土しなかった。

5号柵列　調査区の中央に位置し、北側が1号段状遺構、南側が4号溝と切り合う。新旧関係は1号段状遺構・4号溝の方が新しい。柵列の方向はN－6°－Eである。遺物は出土しなかった。



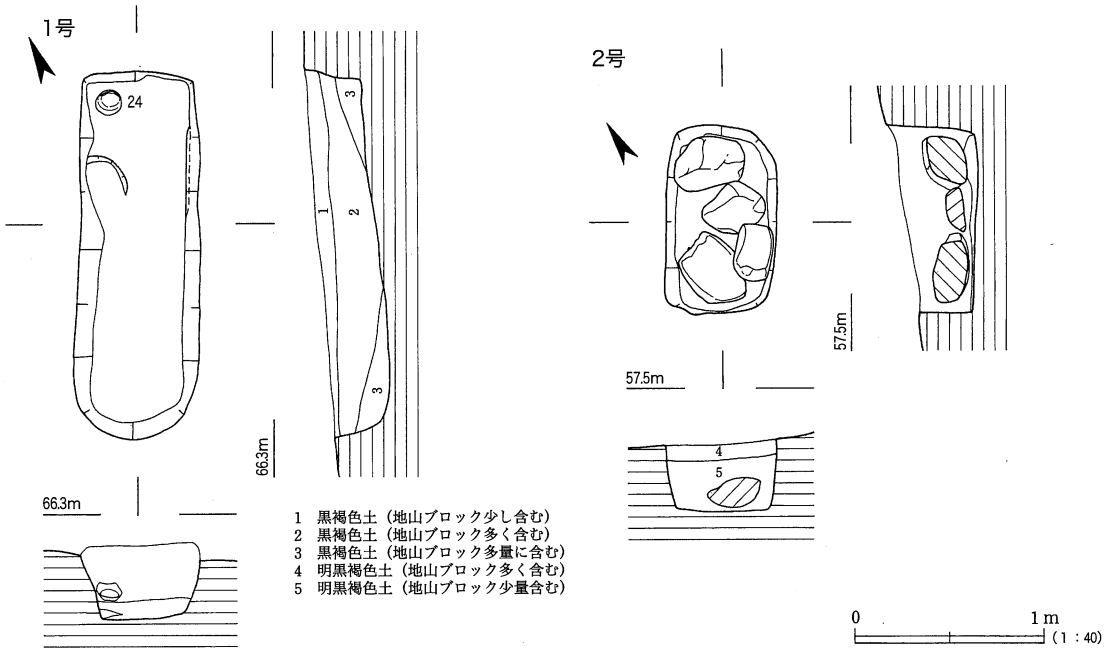
第15図　1号墳墓遺構図

1号墳墓　調査区北端の丘陵頂部付近に位置する。平面形は西側が現在の道路によって削られ、東側の一部が調査区外となるが、方形とみられる。墳丘及び主体部は畑地化されており遺存しない。周溝を含めた規模は東西(7.0)m、南北8.8m、周溝規模は幅約1.6m・深さ約0.6mで断面はV字形である。遺物は周溝の埋土中から土師器小片がわずかに出土した。

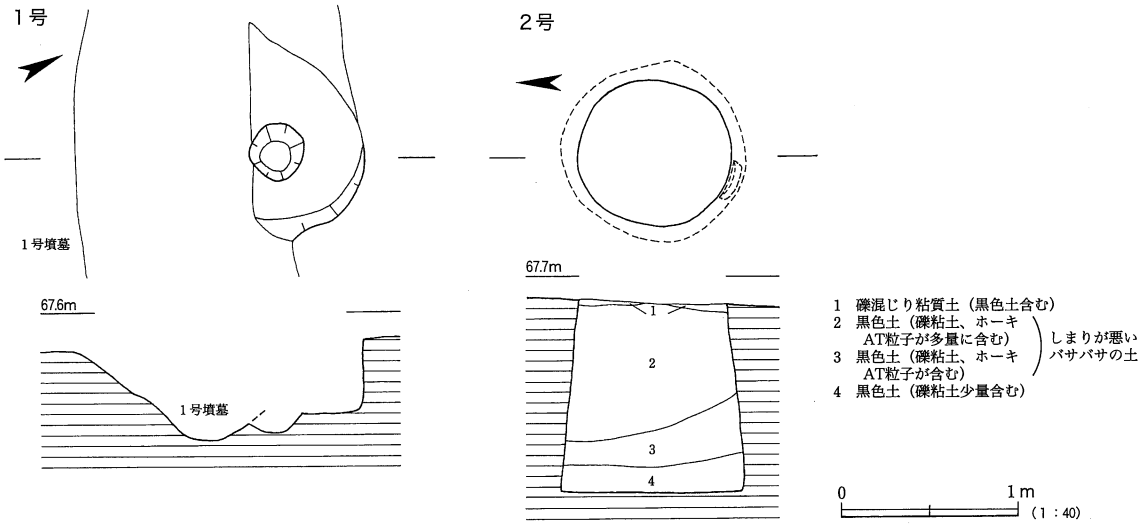
1号土壙墓　調査区北の南斜面に位置する。平面形は長方形で、南側は角がやや丸くなる。長さ1.94m・幅0. 66m・深さ0.32mである。底面は北小口が南小口に比べ約0.16m高い。木棺痕跡は確認できなかった。北小口底面で副葬品の土師器坏24がほぼ正立した状態で完形で出土した。

2号土壙墓　調査区東の斜面に位置する。平面形は隅丸長方形で、長さ0.98m・幅0.58m・深さ0.56mである。土壙内から直径0.3～0.4m・厚さ0.1～0.2m程度の石が4個出土した。遺物は埋土中から土師器、須恵器の小片が1点ずつ出土した。

1号貯蔵穴　調査区北端の丘陵頂部、1号墳墓の周溝南辺に位置する。南半分は1号墳墓の周溝によって切られており、遺存しない。底面規模は長径0.95m・深さ0.42mで、底面中央に杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.32m・深さ0.11mである。遺物は出土しなかった。



第16図　1号・2号土壙墓遺構図

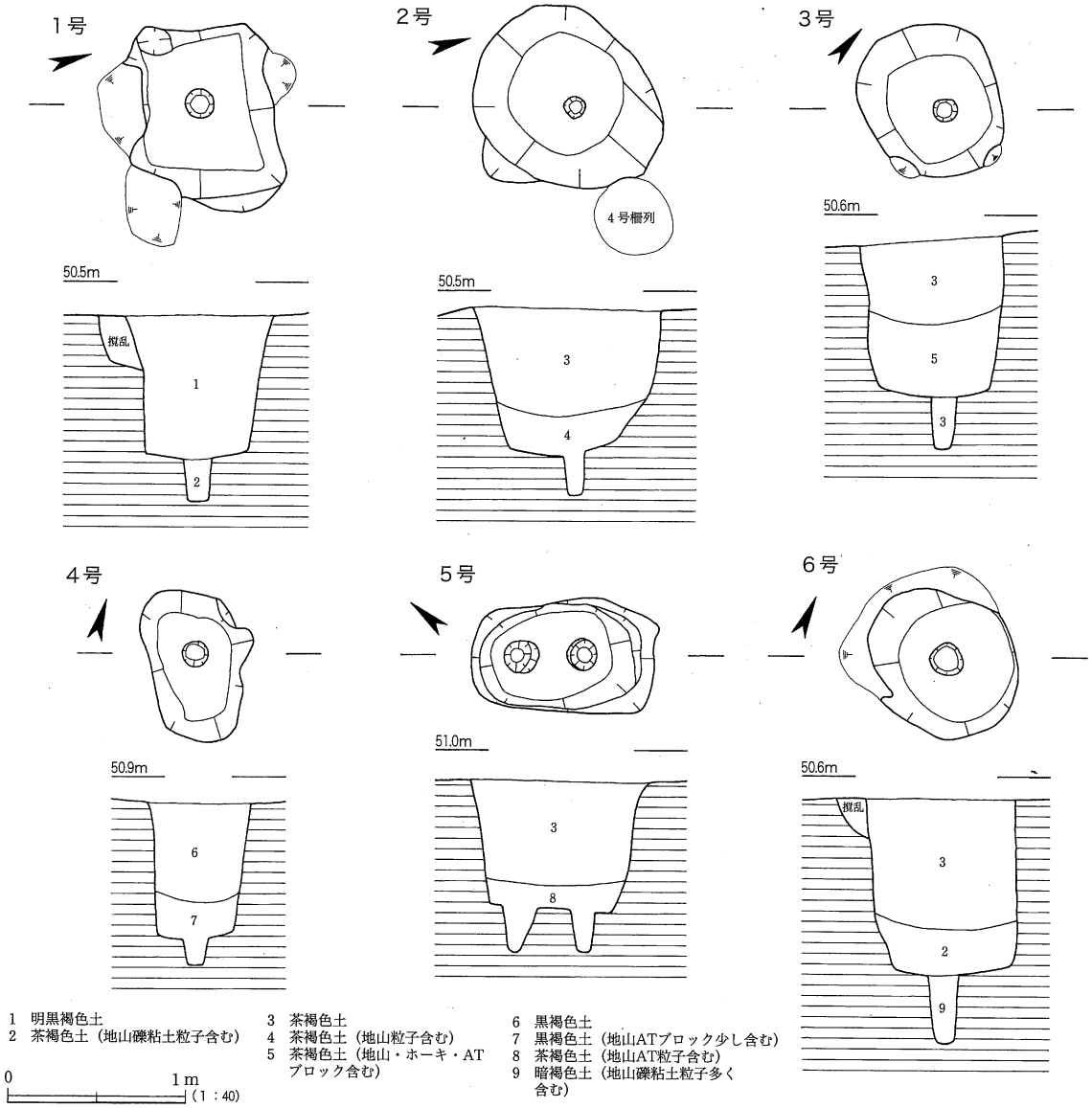


第17図　1号・2号貯蔵穴遺構図

2号貯蔵穴　調査区北端の丘陵頂部、1号墳墓の中央に位置する。平面形はほぼ円形で検出面規模は0.87m×0.82m、底面規模は1.05m×1.02m・深さ1.11mと底部の方が広がる。遺物は出土しなかった。

1号落し穴　調査区南側に位置する。平面形は検出面・底面とも方形、断面形はすぼまり形である。検出面規模は1.06m×0.87m・深さ0.82m、底面規模は0.77m×0.64mである。底面中央に杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.16m・深さ0.24mである。遺物は出土しなかった。

2号落し穴　調査区南側、1号落し穴の北約2mに位置する。平面形は検出面で楕円形、底面で円形となる。断面形はすぼまり形である。検出面規模は1.14m×0.92m・深さ0.83m、底面規模は0.66m×0.64mである。底面やや東寄りに杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.12m・深さ0.25mである。遺物は出土しなかった。

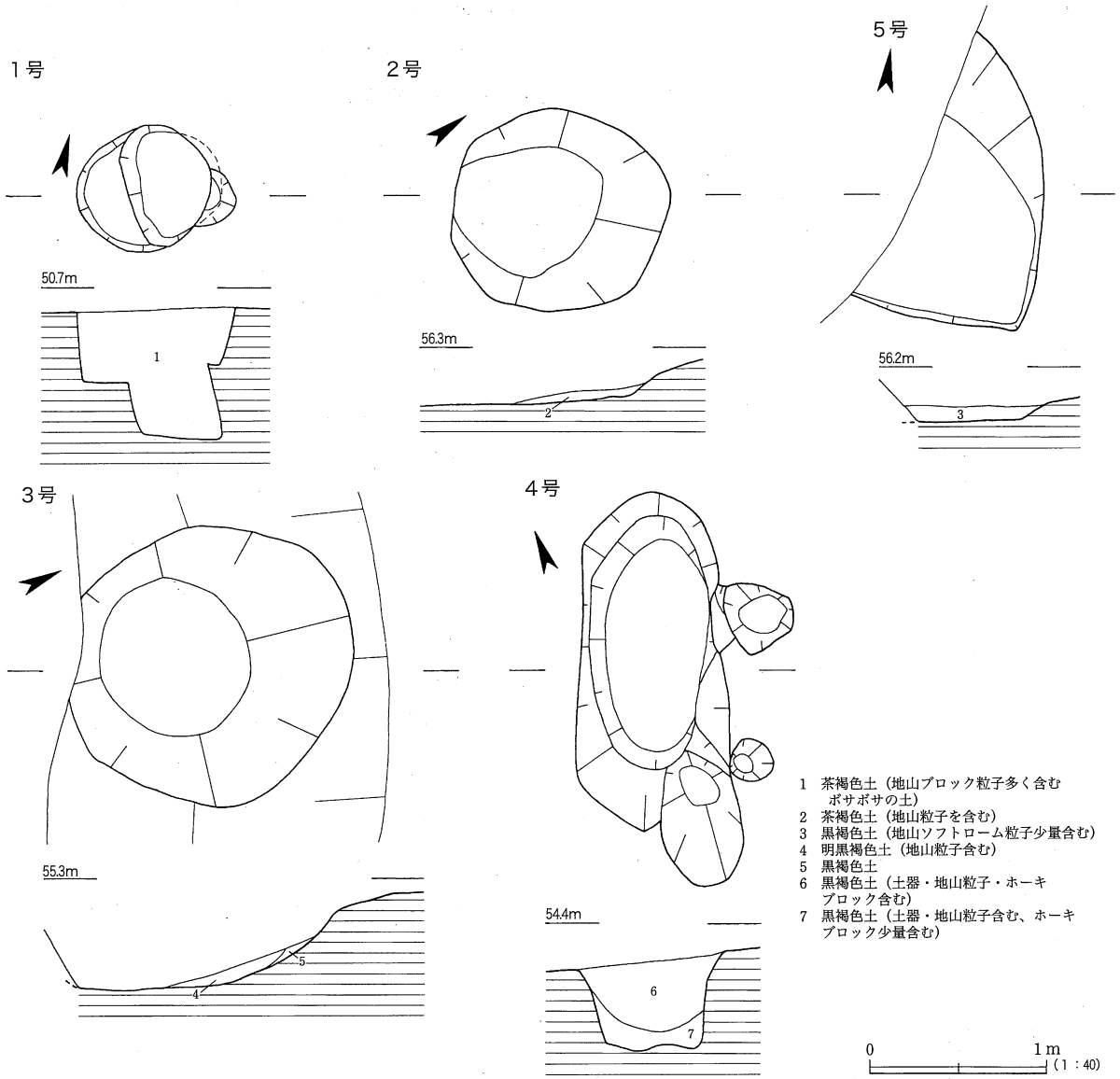


第18図　1号～6号落し穴遺構図

3号落し穴　調査区南側、1号掘立柱建物の南に約2m離れて位置する。平面形は検出面で楕円形、底面で円形となる。断面形はすぼまり形である。検出面規模は0.90m×0.77m・深さ0.91m、底面規模は0.60m×0.55mである。底面やや東寄りに杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.14m・深さ0.29mである。遺物は出土しなかった。

4号落し穴　調査区南側、1号住居の南東約5mに位置する。平面形は検出面・底面とも不整な楕円形である。断面形はすぼまり形である。検出面規模は0.83m×0.60m・深さ0.78m、底面規模は0.64m×0.41mである。底面やや東寄りに杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.14m・深さ0.29mである。遺物は出土しなかった。

5号落し穴　調査区南側、4号落し穴の北約7mに位置する。平面形は検出面・底面とも楕円形で、断面形はすぼまり形である。検出面規模は1.02m×0.66m・深さ0.91m、底面規模は0.67m×0.50mである。底面に杭痕跡と考えられるピットが2個存在する。杭痕跡は短径0.20m・深さ0.26mと短径0.17m・深さ0.24mである。遺物は出土しなかった。



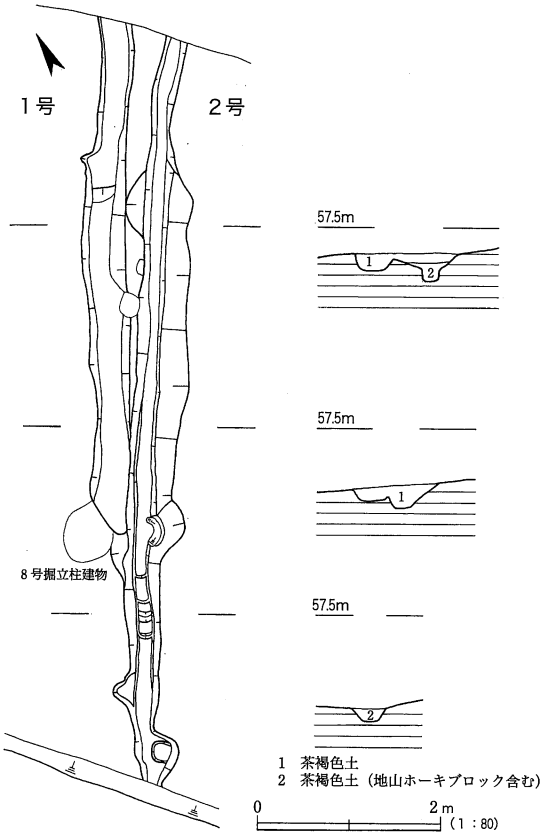
第19図　1号～5号土壙遺構図

6号落し穴　調査区南側、3号落し穴の北約5mに位置する。平面形は検出面で楕円形、底面で円形となる。断面形は垂直形である。検出面規模は0.92m×0.81m・深さ0.98m、底面規模は0.65m×0.64mである。底面やや西寄りに杭痕跡と考えられるピットが1個存在する。杭痕跡は短径0.19m・深さ0.39mである。遺物は出土しなかった。

1号土壙　調査区南側に位置する。平面形は楕円形で、2段に掘り込まれる。検出面規模は0.76m×0.69m・深さ0.75m、底面規模は0.58m×0.46mである。埋土はしまりがなく、遺物は出土しなかった。

2号土壙　調査区東の南斜面に位置する。平面形は不整円形、断面形は凹レンズ状になる。検出面規模は1.27m×1.16m・深さ0.12mで、底面規模は0.83m×0.73mである。遺物は出土しなかった。

3号土壙　調査区中央の南斜面に位置する。平面形は不整円形、断面形は凹レンズ状になり、2号土壙とよく似ている。検出面規模は1.68m×1.44m・深さ0.47m、底面規模は0.90m×0.86mである。遺物は埋土中から土師器（平安時代）小片が出土した。



第20図　1号・2号溝遺構図

4号土壙　調査区中央、1号段状遺構の東側溝と土壙東側肩がほぼ同じであるが、別遺構とした。平面形は楕円形で、検出面規模は1.93m×0.86m・深さ0.57m、底面規模は1.20m×0.59mである。遺物は埋土中から土師器片（平安時代）、須恵器片が出土した。

5号土壙　調査区中央、6号住居の西に位置し、西側が調査区外となる。平面形は不整形で、検出面規模は(1.65)m×0.90m・深さ0.09m、底面規模は1.11m×0.86mである。遺物は出土しなかった。

1号溝　調査区東、斜面に沿って北東から南西に直線的に延びており、2号溝と並行する。北東側は調査区外に広がる。長さ5.6m・幅0.50m・深さ0.40mである。断面形はU字形である。遺物は出土しなかった。

2号溝　調査区東、1号溝と並行して東側に直線的に延びる。北東、南西の端は調査区外に広がる。規模は長さ8.28m・幅0.60m・深さ0.18mである。断面形は開いたV字形である。遺物は須恵器甕の小片が2点出土した。

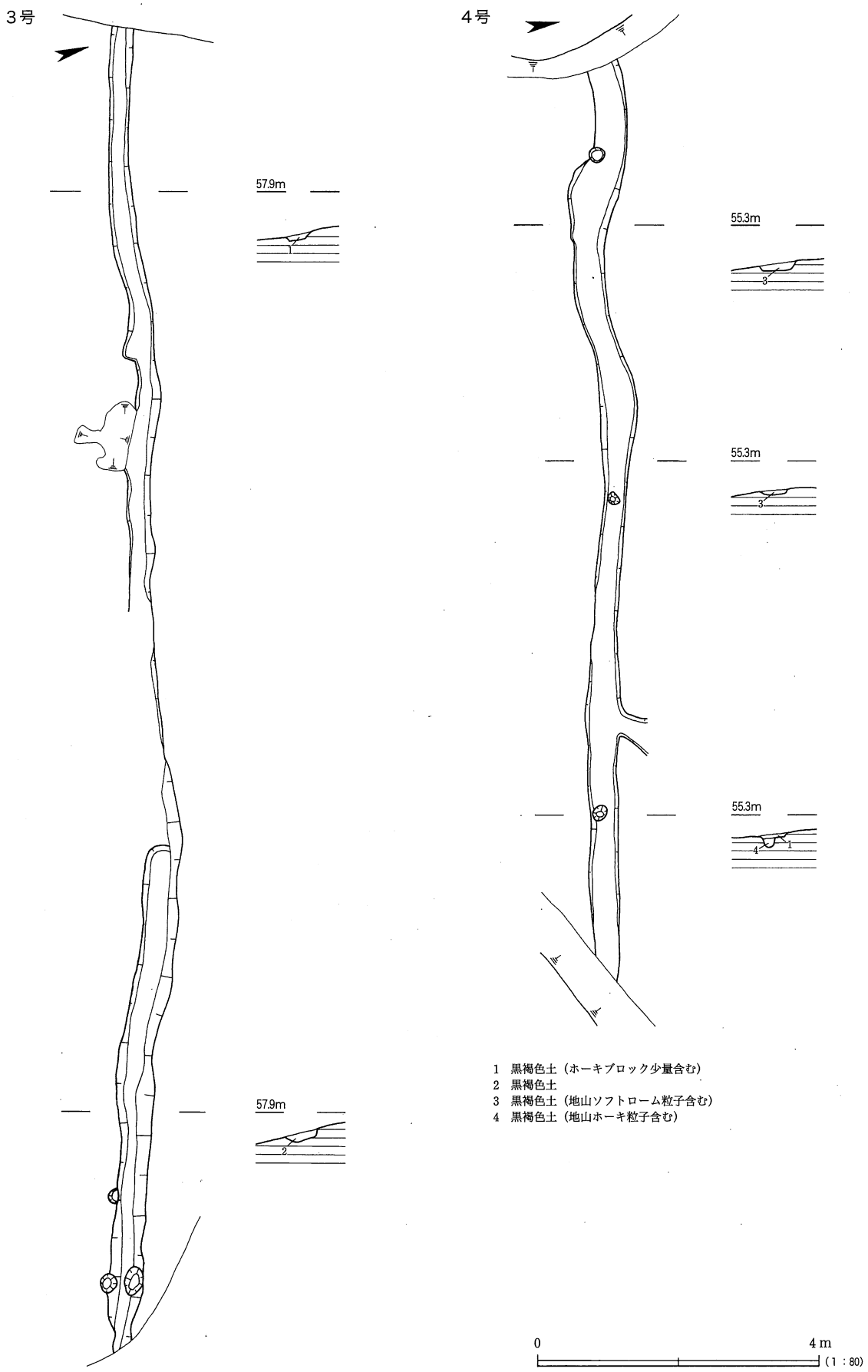
3号溝　調査区中央、斜面の傾きに並行して位置し、溝の両端は調査区外に延びる。規模は長さ18.0m・幅0.56m・深さ0.10mで中央付近は削平によって途切れがちになる。断面形は開いたU字形である。遺物は出土しなかった。

4号溝　調査区中央、3号溝と同様斜面の傾きに並行して位置し、溝の両端は調査区外に延びる。規模は長さ13.2m・幅0.68m・深さ0.07mで、溝の西半分は若干蛇行する。遺物は埋土中から土師器片（平安時代）、須恵器片が出土した。

2　遺物

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石製品がある。遺構に伴う土師器を中心に図化し、説明は表に一括した。図化はしてないが、遺構外から弥生土器・土師器・須恵器が出土している。（図版8・9）弥生土器前期の遺物が遺構外から出土した。壺形土器25は口縁部と頸部の境目に削り出しの段を持ち、前期前半と推定される。壺形土器は他に体部～底部片26・27、口縁部片30、底部34・35がある。甕形土器は口縁部外面に刻みを持つ甕28・29・33、刻み目凸帯文土器31・32が出土した。刻み目凸帯文土器は断面三角形の凸帯を張り付け、凸帯部と端部に刻み目が巡る。胎土、焼成、調整から弥生土器と考えられる。土師器坏B36・37は伯耆国庁第2段階[註2)]（SK-05）に比定され、37は焼成後底部穿孔を施す。須恵器高坏38は坏部片でTK73[註3)]に比定される。

石製品は遺構に伴う遺物と、その他の包含層から出土した遺物のうち代表的なものを図化してそれ以外は表のみとした。凹石、敲石、磨石の名称は複数の使用痕がある場合、①凹み、②敲き、③磨りの順に優先して、下位の使用痕は表の備考で記述した。

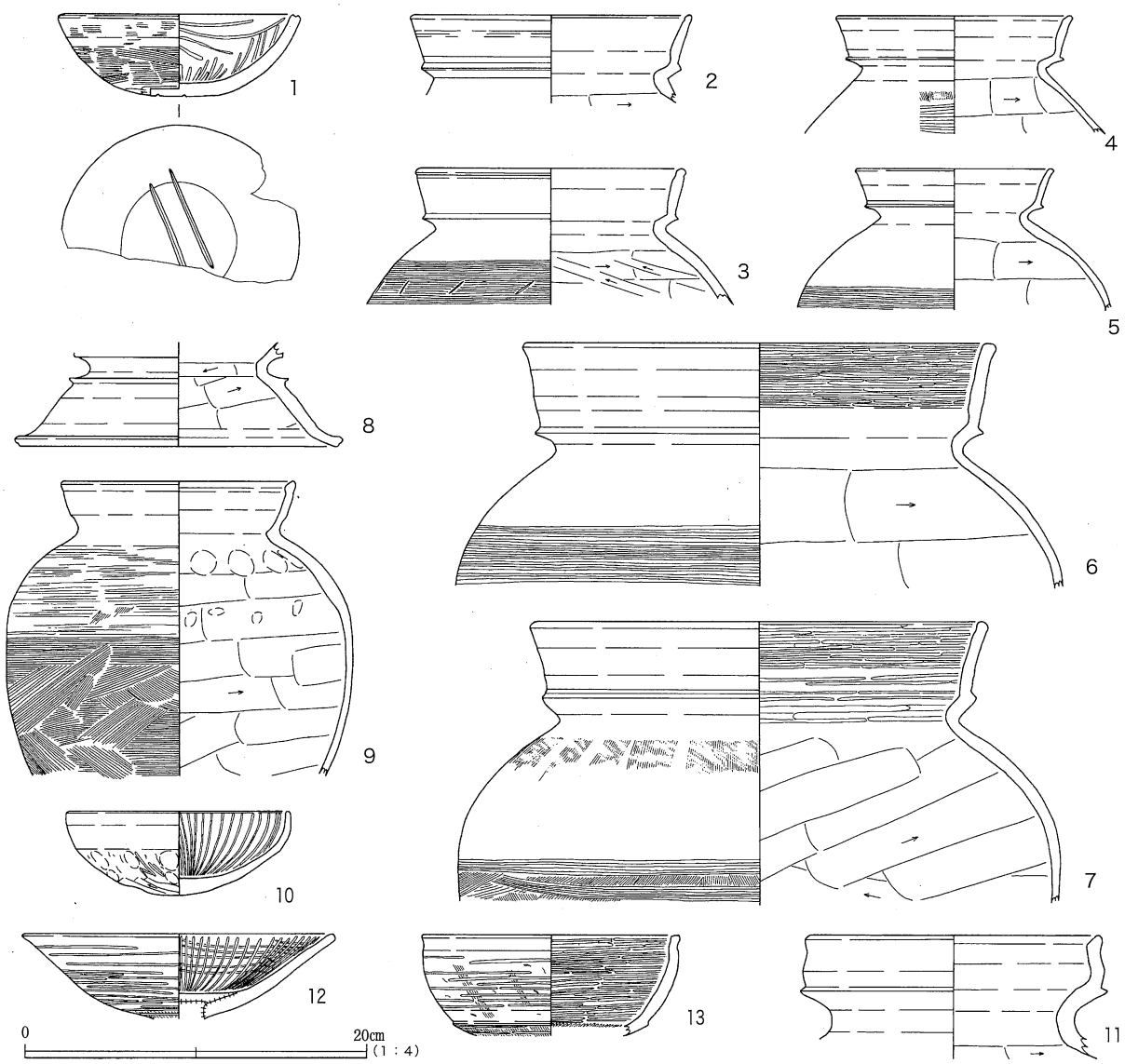


第21図　3号・4号溝遺構図

土器・土製品観察表

〔法量(　　)は推定値〕

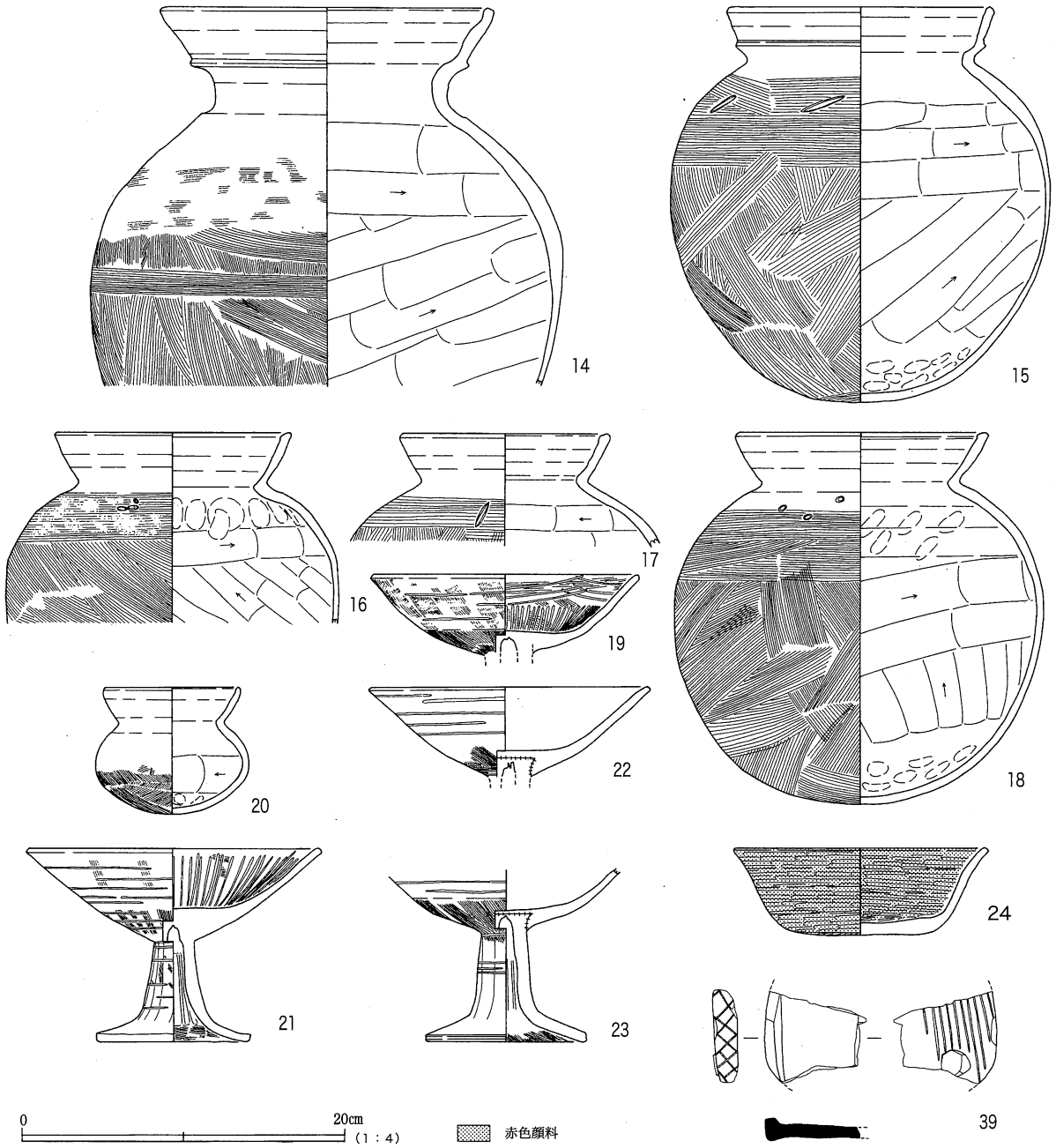
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形　　態	手　　法	胎土　焼成　色調　遺存度
1号住居 埋土	1	埦	口径　13.3	体部は内湾しながら外方に開き、口縁端部は丸くおさめる、一部はヨコナデにより凹線状になる。底部外面に焼成後の2条の線刻有り。	外面ハケメ後、口縁部ヨコナデ。内面底部放射状のヘラミガキ、口縁部横方向のヘラミガキ。	1㎜大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。口縁部外面に煤付着。口縁部～底部1/2遺存。
2号住居 埋土	2	甕	口径　(16.0)	口縁部は上外方へ開く二重口縁。端部は丸くおさめる。屈曲部は横方向に引き出す。	口縁部外面櫛描き沈線をナデ消し。肩部内面横方向のヘラケズリ。	1～3㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁部外面に煤付着。口縁部～肩部1/7遺存。
埋土	3	甕	口径　(15.2)	口縁部は上外方へ開く二重口縁。端部は丸くおさめる。屈曲部は横方向に引き出す。屈曲部上面と口縁端部外面が強いナデにより沈線状に凹む。肩部外面に刻み目が巡る。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ハケメ後ナデ消し。肩部外面横方向のハケメ、内面横方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の長石・石英粒含む。焼成良好。淡茶褐色。体部外面に煤付着。口縁部～肩部1/7遺存。
3号住居 埋土	4	甕	口径　(13.6)	口縁部は上外方に外反する二重口縁で、口縁端部内面に面をなし、丸くおさめる。屈曲部はヨコナデにより横方向に引き出す。	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面横方向のハケメ後上半ナデ消し。肩部内面横方向のヘラケズリ。	1～3㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡桃褐色。口縁部～胴部上半部1/5遺存。
埋土	5	甕	口径　(11.2)	口縁部は上外方に外反する二重口縁で、口縁端部は丸くおさめる。屈曲部はヨコナデにより横方向に引き出す。	口縁部内外面ヨコナデ。屈曲部上面に櫛描沈線文が残る。肩部外面横方向のハケメ後上半ナデ消し。肩部内面横方向のヘラケズリ。	1㎜大の長石・石英・茶色粒子含む。焼成良好。淡黄褐色。口縁部、肩部下半の外面に煤付着。口縁部～肩部1/6遺存。
埋土	6	甕	口径　(27.6)	口縁部は上外方に外反する二重口縁。口縁端部に面をもち、屈曲部上面に一条の沈線が巡る。屈曲部はヨコナデにより横方向に引き出す。	口縁部から頸部内面横方向のヘラミガキ。肩部外面縦方向のハケメ後ナデ消し。肩部内面横方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の長石・石英含む。焼成普通。淡黄褐色。口縁部～胴部上半部1/5遺存。
埋土	7	甕	口径　(26.0) 最大胴径 (35.2)	口縁部は上外方に外反する二重口縁で、口縁端部を丸くおさめる。屈曲部はヨコナデにより横方向に引き出す。	口縁部から頸部内面横方向のヘラミガキ。口縁屈曲部上面に櫛描沈線文が一部残る。肩部外面横方向のハケメ後ナデ消し。肩部内面横から斜め方向のヘラケズリ後ナデ。	1～2㎜大の長石・石英含む。焼成良好。淡黄褐色。口縁部に黒斑あり。口縁部～胴部上半1/5遺存。
埋土	8	鼓形 器台	脚台径 (19.2)	脚台部片。大きく外反し端部は凹面をなす。筒部の稜は鋭く屈曲する。	外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ。	1～2㎜大の長石・石英含む。焼成良好。淡黄褐色。脚台部1/4遺存。
4号住居 埋土	9	甕	口径　(13.4) 最大胴径 (20.2)	口縁部はわずかに内湾するくの字口縁で、端部内側が肥厚して面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整、肩部ナデ。体部内面ヘラケズリ、肩部指頭圧痕。	1～2㎜大の砂粒含む。焼成良好。黄褐色。外面煤付着。口縁部～胴部1/3遺存。
5号住居 床面	10	埦	口径　12.6 器高　4.9	体部は内湾しながら外方に開き、口縁部で直立し端部を丸くおさめる。底部外面が若干平らになる。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ、指頭圧痕、一部にヘラミガキ。底部外面ケズリ、内面ヨコナデ後暗文風のヘラミガキ。体部外面に粘土のひびがある。	1～2㎜大の長石・石英含む。焼成良好。赤褐色。ほぼ完形。
6号住居 埋土	11	壷	口径　(16.8)	口縁部は直立する二重口縁。端部は肥厚し、内側に面をもつ。屈曲部は横方向に引き出す。	口縁部、頸部内外面ヨコナデ。肩部内面横方向のケズリ。	1～2㎜大の長石・石英含む。焼成良好。淡茶褐色。口縁～肩部1/5遺存。
埋土	12	高坏	口径　(18.0)	皿状の坏部。脚部との接合は差し込み式。	外面横方向、内面横方向のヘラミガキ後放射状のヘラミガキで器面平滑。	1～2㎜大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。坏部1/2遺存。
埋土	13	高坏	口径　(15.0)	埦状の坏部。口縁部は内湾しながら外方に延びる。口縁端部はわずかに内傾し平坦面をなす。口縁部と坏底部の境に稜をつくる。	外面横方向の粗いヘラミガキ、内面横方向のヘラミガキ。底部内面放射状のヘラミガキ。口縁端部外面直下に強いナデ。	1㎜大の長石・石英含む。焼成良好。赤褐色。坏部1/7遺存。
8号住居 埋土	14	壷	口径　19.7 最大胴径 19.1	口縁部は外反する二重口縁。口縁端部は外傾し面をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整、肩部ナデ。体部内面ヘラケズリ。	2～3㎜大の長石・石英粒子含む。焼成良好。淡黄白色～淡桃褐色。肩部外面と口縁部に黒斑あり。口縁部～胴部片。
P2	15	甕	口径　16.5 最大胴径 23.4 器高　24.6	口縁部は外反する二重口縁。口縁屈曲部上部に沈線が一条巡る。肩部外面に刻み目が巡る。体部は球形。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整、肩部ナデ。体部内面低いヘラケズリ、底部指頭圧痕。	2～3㎜大の砂粒・茶色粒子含む。焼成良好。淡黄白色。体部外面の最大胴径以下に煤付着。口縁部～底部1/2遺存。
埋土	16	甕	口径　(16.4) 最大胴径 (22.6)	口縁部は内湾するくの字口縁で、端部内側が肥厚して面をもつ。肩部外面棒状工具による刺突痕3個有り。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整、肩部ナデ。体部内面低いヘラケズリ、肩部指頭圧痕。	1㎜大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。口縁部～胴部上半部1/5遺存。
埋土	17	甕	口径　(12.6)	口縁部はわずかに内湾するくの字口縁で、端部内側が肥厚して凹面をもつ。肩部外面に刻み目をもつ。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整、肩部ナデ。体部内面低いヘラケズリ。	1㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡黄褐色。口縁部～肩部1/5遺存。
8号住居 床面	18	甕	口径　15.2 最大胴径 22.8 器高　23.1	口縁部はわずかに内湾するくの字口縁で、端部内側が肥厚して面をもつ。肩部外面棒状工具による刺突痕3個有り。体部は球形。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整、肩部ナデ。胴部内面低いヘラケズリ、肩部・底部に指頭圧痕。肩部は指頭圧痕後ナデ。	1㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡黄白色。体部外面の最大胴径以下に煤付着。ほぼ完存。



第22図　1号～6号住居出土遺物

〔法量(　　)は推定値〕

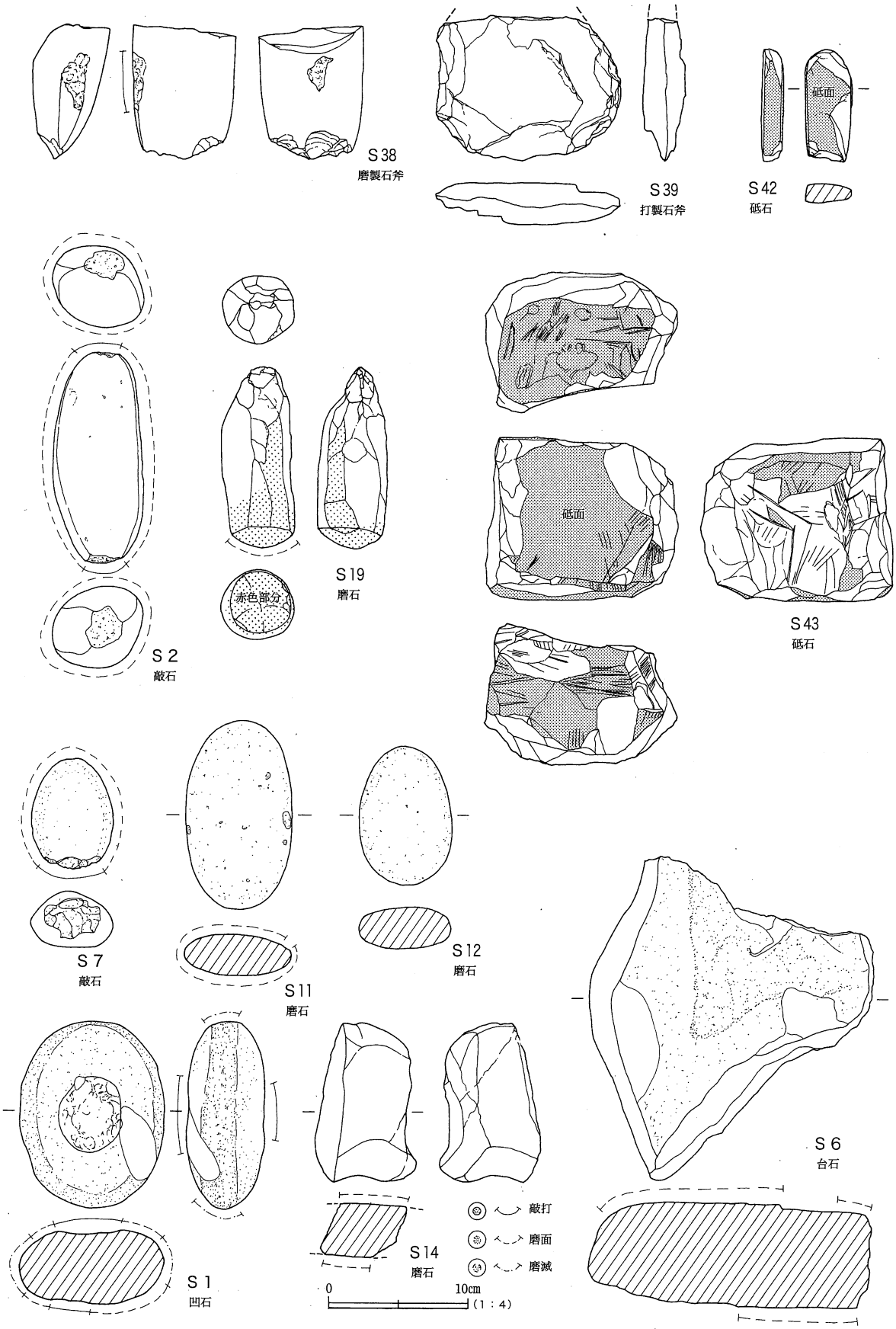
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形　　態	手　　法	胎土　焼成　色調　遺存度
埋土	19	高坏	口径 16.3～16.6	皿状の坏部。口縁端部角張り外側に面をもつ。脚部との接合は差し込み式。	外面ハケメ後上半ナデ消し後、粗い横方向のミガキ。内面ハケメ後、下半縦方向のミガキ、上半横方向の粗い六角形状のヘラミガキ。	1～2㎜大の砂粒含む。焼成良好。赤褐色。内外面の一部黒色、煤か？　坏部のみ遺存。
9号住居 床面	20	小　型 丸底壺	口径 8.2 最大胴径 9.4 器高 7.9	口縁部は内湾気味に立ち上がるくの字口縁。体部は偏球。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケメ調整後、肩部外面ナデ消し。体部内面低いヘラケズリ後、底部指頭圧痕。	1㎜大の砂粒・茶色粒子含む。焼成良好。淡赤褐色。ほぼ完存。
埋土	21	高坏	口径 17.9 脚径 9.6 器高 12.0	皿状の坏部。口縁端部と脚端部は角張る。坏底部は厚く、脚部との接合は差し込み式。	坏部外面ヨコナデ後、横方向の粗いミガキで縦方向のハケメを残す。坏部内面放射状のヘラミガキ、ハケメを残す。柱状部外面面取り、上位に粗いヘラミガキ、ハケメが残る。柱状部内面絞り目、裾部ハケメ後ナデ。	2～3㎜大の石英・長石含む。焼成普通。淡橙褐色。坏部1/2遺存、脚部完存。
埋土	22	高坏	口径 17.0	皿状の坏部。口縁端部は角張る。脚部との接合は差し込み式。	坏部外面横方向の粗いヘラミガキ、ハケメが残る。坏部内面ヘラミガキだが磨滅により不明瞭。	1～2㎜大の石英・長石含む。焼成普通。淡桃褐色。坏部1/2遺存。



第23図　8号・9号住居、1号土壙墓、遺構外出土遺物

〔法量(　　)は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形　　態	手　　法	胎土　焼成　色調　遺存度
9号住居 埋土	23	高坏	脚径　9.6	皿状の坏部。脚部端部は凹面をなす。脚部との接合は差し込み式。	坏部外面上半横方向のヘラミガキ、下半縦方向のハケメ。坏部内面磨滅により不明瞭であるがヘラミガキか。柱状部外面面取り後、横方向のヘラミガキ。柱状部内面絞り目。	1㎜大の砂粒含む。焼成普通。黄褐色。脚部ほぼ完存、坏部は底部のみ遺存。
1号土壙墓 底面	24	坏A	口径　15.4 器高　5.5	口縁部は外傾し、端部が外反する。	口縁部内外面ヨコナデ後、横方向のヘラミガキで、内面は特に丁寧。底部外面ヘラミガキ後、ナデ調整。底部内面回転利用、一方向のヘラミガキ。	1㎜大の砂粒含む。焼成良好。淡桃褐色。ほぼ完形。全面に赤色顔料塗彩。
遺構外 (6号住居埋土)	39	風字硯	長さ　(5.7) 幅　(6.3) 外堤部厚さ　1.8 陸部厚さ　0.7	硯尻部の破片。外堤部と陸部からなり、外堤は硯尻部で細くなる。脚台部は欠損するが、痕跡から六角形と推定される。	外堤部側面は横方向のケズリ後、格子状の沈線を刻む。外堤部、裏面ともナデ仕上げ。裏面は平行叩き目が遺存する。	1～3㎜大の砂粒含む。焼成良好。灰色。


S38
磨製石斧
S39
打製石斧
S42
砥石
砥面
S2
敲石
S19
磨石
赤色部分
砥面
S43
砥石
S7
敲石
S11
磨石
S12
磨石
S6
台石
S1
凹石
S14
磨石
敲打
磨面
磨滅
0
10cm
(1：4)

第24図　石製品

石製品一覧表

〔cm・g：（ ）は遺存値、頁の○は図版〕

種類	No.	頁	長さ	幅	厚さ	重量	遺存	備　　考
凹石	S 1	29・⑩	13.4	10.3	5.3	710	ほぼ完存	平坦面の片面に1ヵ所ずつ、計2ヵ所の凹み。両面磨り。周縁部に磨滅痕。
敲石	S 2	29・⑩	15.1	6.5	5.9	780	完存	先端2ヵ所に敲き。磨り全周。8号住居床面。
	S 3	⑩	10.5	5.7	5.5	398	ほぼ完存	先端2ヵ所に敲き。平坦面磨り。
	S 4	⑩	8.7	5.2	3.9	228	完存	先端2ヵ所に敲き。磨り全周。
	S 5	⑩	8.1	6.4	7.4	530	完存	先端2ヵ所に敲き。磨り面有り。
	S 6	⑩	10.2	6.0	3.8	312	完存	先端2ヵ所に敲き。
	S 7	29・⑩	8.0	5.8	4.0	218	完存	先端1ヵ所に敲き。磨り全周。
	S 8	⑩	15.3	7.8	7.7	945	ほぼ完存	先端1ヵ所に敲き。
	S 9	⑩	(14.7)	8.1	6.0	(765)	欠損	先端1ヵ所に敲き。
	S 10	⑩	(11.4)	8.4	5.3	(635)	欠損	周縁部1ヵ所に敲き。
磨石	S 11	29・⑪	13.6	7.6	2.9	466	完存	全面磨り。
	S 12	29・⑪	10.0	6.6	2.9	292	完存	全面磨り。
	S 13		(7.4)	(7.5)	(8.6)	(530)	欠損	全面磨り。
	S 14	29・⑪	11.4	(6.1)	(3.9)	(400)	欠損	平坦面両面磨り。
	S 15	⑪	8.9	5.7	3.1	246	完存	平坦面両面磨り。
	S 16	⑪	(9.7)	(5.2)	2.7	(210)	欠損	平坦面両面磨り。
	S 17	⑪	10.3	8.5	6.9	870	完存	磨り2面。
	S 18	⑪	(4.8)	5.8	4.9	(130)	欠損	磨り2面。
	S 19	29・⑪	13.0	4.9	4.8	494	完存	先端部1ヵ所磨り。先端部1ヵ所に加工痕。一部赤化。
	S 20	⑪	15.8	8.9	5.3	860	完存	平坦面磨り。
	S 21	⑪	(8.2)	(7.3)	(2.7)	(204)	欠損	磨り1面。
	S 22	⑪	8.8	(6.8)	5.9	(418)	欠損	磨り1面。
	S 23		(4.0)	(2.3)	(1.0)	(8)	細片	
	S 24		(3.3)	(1.9)	(0.3)	(3)	細片	
台石・石皿	S 25		11.6	(14.8)	9.5	(1540)	欠損	磨り4面。
	S 26	29・⑪	(20.3)	(23.2)	7.5	(4220)	欠損	磨り2面。4号住居床面。
	S 27		(9.1)	(6.2)	(7.0)	(244)	欠損	磨り2面。
	S 28		(15.7)	(14.2)	(13.7)	(3780)	欠損	磨り2面。
	S 29		(11.2)	(10.1)	(14.3)	(1980)	欠損	磨り2面。
	S 30		(9.9)	(6.3)	(5.4)	(366)	欠損	磨り2面。
	S 31		(18.2)	(7.9)	7.3	(1360)	欠損	磨り2面。
	S 32		(14.2)	(8.7)	(11.3)	(1660)	欠損	磨り2面。
	S 33		(18.6)	(7.3)	(10.9)	(1820)	欠損	磨り1面。
	S 34		(10.9)	(8.1)	(7.9)	(555)	欠損	磨り1面。
	S 35		(12.9)	(7.7)	(9.0)	(1040)	欠損	磨り1面。
	S 36		(12.2)	(8.7)	(10.5)	(1620)	欠損	磨り1面。
	S 37		(13.2)	(10.6)	(12.6)	(2280)	欠損	磨り1面。
磨製石斧	S 38	29・⑩	(9.6)	(7.4)	(5.5)	(525)	欠損	
打製石斧	S 39	29・⑩	(10.4)	13.1	3.0	(565)	欠損	
	S 40	⑩	(12.7)	8.9	3.0	(450)	欠損	
	S 41	⑩	(9.8)	(5.2)	2.0	(122)	欠損	
砥石	S 42	29・⑩	(8.0)	3.3	1.4	(63)	欠損	
	S 43	29・⑪	11.5	13.5	9.1	1780	完存	
	S 44	⑪	(11.0)	(7.6)	(6.0)	(620)	一部欠損	
	S 45		(13.1)	(8.9)	9.7	(1200)	欠損	

Ⅳ　まとめ

今回発掘調査した船沖遺跡では縄文時代から中世に至る多様な遺構・遺物が確認された。大まかな立地として調査区北側が奈良時代から平安時代の葬地、南側が古墳時代の竪穴式住居、掘立柱建物といった集落跡である。調査区北側は貯蔵穴が存在するため、北側に集落が広がっていた可能性もある。そして調査区南端にまとまって縄文時代の落し穴が存在する。

ここでは竪穴式住居、掘立柱建物など集落に関する遺構、墳墓に関する遺構、落し穴の３つに分けて発掘調査によって分かった事を整理してまとめとする。

集落

竪穴式住居　住居は調査区中央の斜面から南に広がる平坦地で合計９棟確認した。先ず遺物について、次に遺構との関係について述べる。

住居から出土した遺物は、必ずしも良好な出土状態でなく住居廃絶後に流入した遺物や小片が多かったが、住居の築造時期に伴うと考えられる遺物について述べる。出土土器は土井編年[註4)]にあてはめると古墳時代前期前半（４世紀前葉頃）から５世紀後半頃の時期である。土師器を主とし、須恵器は埋土中の僅かな小片を除いてほとんど出土していない。

３号住居－埋土中から出土した土器で、口縁部内面にヘラミガキをする大型の甕６・７、口縁部ヨコナデ３単位の甕４は、宮ノ下４・６号住居出土土器の時期（４世紀前葉から中葉頃）に相当する。

２号住居－埋土中の土器で、甕３は口縁端部を丸くおさめ、肩部外面に刻み目が巡る。上神猫山方形周溝墓出土土器に相当（４世紀後葉頃）する。

６号・８号・９号住居－８号住居は埋土中の土器がほとんどであるが、床面から出土したくの字口縁甕18は体部内面ヘラケズリが頸部まで達せず、体部が球形である。９号住居埋土中出土の高坏21・22・23はいずれも坏部が皿状で、８号住居の高坏19の坏部がわずかに外反するのに比べ新しい要素である。これらの土器は上神猫山方形周溝墓出土土器と後ロ谷Ｂ21・２号住居出土土器の間を埋める時期とみられ、５世紀前半頃と推定される。６号住居埋土中の高坏の12は皿状の坏部で、高坏13は椀状の坏部で坏底部と坏部の境目に稜をもつ。12が５世紀前半、13が５世紀後半と推定される。

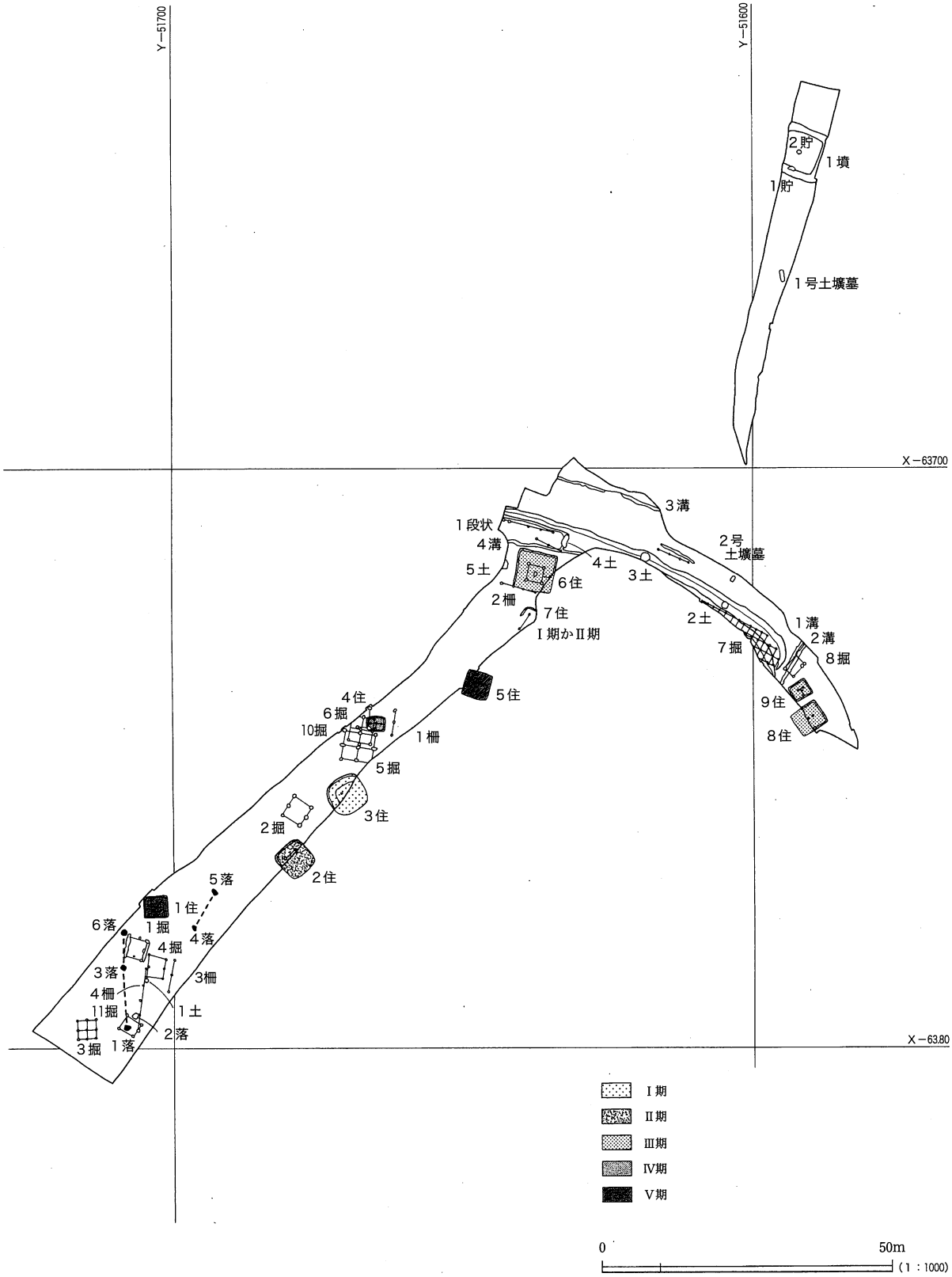
４号住居－遺物の出土量が僅かであるが、甕９はやや退化したくの字口縁で体部内面のヘラケズリが頸部まで達せず低く長胴化しており、８号住居の甕18より新しく５世紀中頃と推定される。１号・５号・６号住居で見られる椀・高坏は出土していない。

１号・５号住居－１号住居埋土中の椀１は内面放射状と横方向のヘラミガキ、５号住居床面の椀10は暗文風ヘラミガキで、１のほうが皿に近く古い要素をもつ。５世紀後半頃の時期と推定される。

先に住居の遺物を時期別に分けたが、遺構ではどの様になるか検討する。

３号・２号住居のどちらも隅丸方形で調査区南寄りの隣接した場所にある。７号住居は遺物が出土していないが、隅丸方形または多角形が想定され辺の方向が３号・２号住居に近く、４世紀代の可能性が推定される。

６号住居は方形、８号・９号住居は長方形で、調査区北寄りの斜面沿い標高54～57mに分布する。いずれも南あるいは南東辺に壁際中央ピットをもっている。８号住居と９号住居はどちらも２本柱とみられ、柱間と壁際中央ピットを長方形に一段掘り下げており、９号住居の方が小型化するが類似しているといえる。このため２つの住居は時期的に連続していると推定され、次の時期の４号住居が小型で２本柱、柱間と壁際中央ピットを長方形



第25図　船沖遺跡時期別遺構模式図

に一段掘り下げることから、8号→9号住居→4号住居への流れと考えられる。以後、斜面の方向が異なる8号・9号住居を除き、住居の辺がほぼ東西南北の方位に沿っているのも特徴的である。1号・5号住居は調査区南に点在する。

以上、遺物と遺構から住居を時期別に整理すると次のようにまとめられる。

Ⅰ期－3号住居

Ⅱ期－2号住居

Ⅲ期－6号住居・8号住居・9号住居

Ⅳ期－4号住居

Ⅴ期－1号住居・5号住居

限られた調査範囲という前提ではあるが、隣接する同時期の住居間距離は、7号住居がⅠ期と仮定すると、Ⅰ期－3号住居と7号住居間約43m、Ⅲ期－6号住居と8号住居・9号住居間約50～53m、Ⅴ期－1号住居と5号住居間約67mと時期が下るにつれて領域の拡大していく様相が復元できる。各時期とも住居は1棟、ないし2棟といった程度であるとみられる。

掘立柱建物　掘立柱建物は調査区中央の斜面から南に広がる平坦地で合計11棟確認し、その分布は竪穴式住居の分布とほぼ一致する。住居に伴うものは特定できなかったが、各時期のものが存在すると考えられる。

建物規模は桁行1間×梁行1間が1棟（8号・11号掘立柱建物)、桁行2間×梁行1間が3棟（1号・2号・4号掘立柱建物)、桁行2間×梁行2間が4棟（3号・5号・10号掘立柱建物)、桁行14間以上×梁行3間以上が1棟（7号掘立柱建物）である。桁行2間×梁行2間の建物のうち、1号掘立柱建物は桁行側に布掘りするもので、3号・5号・10号掘立柱建物は総柱建物である。

7号掘立柱建物は長大でかつ柱間が狭い総柱建物で、東側が張り出すもので他の建物とは様相が異なる。このような掘立柱建物は、市内・東町の山名氏館跡推定地[註5)]で発掘した15世紀と推定される掘立柱建物群に似る。しかし、山名氏館跡推定地の建物は柱穴掘り方に根石状の礫が敷かれるという違いもあり、関連性については不明確である。

掘立柱建物の造られた時期は土師器が少量出土したにとどまるため時期の決め手に欠くが、建物主軸方向で分けるとおよそ3つに分けられる。斜面にある7号・8号・9号掘立柱建物は桁行あるいは梁行が斜面と平行で、2号・11号掘立柱建物は北から約30°東に振れ、それ以外は北から10°前後東に振れる。この3つのグループは造られた時期の違いを示す可能性がある。

1号段状遺構　調査区中央で斜面に並行する形で溝で区画された内側にピットが東西に並ぶ。ピットは南側に展開するかどうか不明であるが、何らかの建物であった可能性が考えられる。造られた時期は伯耆国庁第2段階（SD-05）の遺物が出土しており、9世紀後半頃と推定される。

土壙　調査区中央の斜面を中心に5基確認した。4号土壙は伯耆国庁第2段階（SD-05）から第3段階（SD-38・39）の土器が出土し、3号土壙も小片ながら伯耆国庁第2段階・第2段階の土器が出土した。2号土壙と3号土壙は平面形・断面形が類似し、同時期のものと推定される。これらの造られた時期は9世紀後半～10世紀前半頃と推定される。

柵列　調査区中央から南で5確認した。柵列規模は1号・3号・5号柵列が2間、2号柵列が3間、4号柵列が4間確認したが5号柵列以外は調査区外まで延びている可能性がある。中央斜面にある2号・5号柵列が斜面に沿い、調査地南側にある1号・3号・4号柵列は北から10°前後東に振れており、1号・3号・4号柵列は1

号・３号・～６号・10号掘立柱建物の主軸方向に合う。１号柵列の造られた時期は出土遺物から古墳時代の可能性がある。

溝　調査区中央の斜面で４条確認した。いずれも調査区外まで延びており、斜面に直交する１号・２号溝と、斜面に並行する３号・４号溝がある。造られた時期は出土遺物から、２号溝が古墳時代、４号溝が平安時代の可能性がある。

墳墓

調査区北側の斜面と北端尾根で墳墓１基、土壙墓２基を確認した。

１号墳墓　調査区北端の丘陵頂部で確認した。方形の周溝が巡るが、主体部は削平によって遺存しない。築造時期は周溝の断面形が墳丘側の丸くならないＶ字形であること、埋土中から出土した僅かな土師器（伯耆国庁第２段階か）から概ね９世紀代とみられる。

１号土壙墓　調査区北側の斜面で確認した。北側小口底面で副葬品の土師器坏Ａが出土したため北頭位と推定される。この土器の器形は口縁部が外傾し、端部が外反する。調整は全面ヘラミガキの丁寧なつくりで、口縁部内外面横方向のヘラミガキである。このようなタイプの土器は伯耆地方ではこれまでに未確認で、器形は畿内の土器編年でいう飛鳥Ⅳの土器[註6)]に近いが、この時期の特徴である暗文は無い。造られた時期は断定しかねるが器形から飛鳥Ⅳの時期（７世紀第４四半期頃）と推定される。この時期の墓としては市内の長谷遺跡[註7)]２号土壙墓、羽合町の長瀬高浜遺跡[註8)]で木棺墓６基、土壙墓２基が知られている。

２号土壙墓　調査区東側の南斜面で確認した。埋土中で直径約0.3～0.4mのやや平らな石が４個底面から若干浮いた状態で出土した。底面から浮いていたこと、火葬墓の棺台にみられるような火を受けた様子が無いことから、埋葬方法は土葬とみられ、石は遺体の上に乗せたものと考えられる。造られた時期は、遺物が小片しかないため決め手に欠くが、淀江町・福岡遺跡[註9)]ＳＸ-01が、２号土壙墓と同様に大きめの礫６個を遺体の上に詰めた状態で出土しており、和鏡（網薄双鳥文鏡）等の副葬品が出土し平安時代末以降の築造と推定されていることから、造られた時期は平安時代から鎌倉時代の土壙墓と推定される。

落し穴

調査区南端付近で６基まとまって確認した。平面形は円形３基、楕円形２基、方形１基で、いずれにも底面にピット状の下部施設があった。遺物は出土していないが形態から、落し穴が造られた時期は縄文時代と推定する。その立地は丘陵縁辺部に限られ、底面が円形の１号・３号・６号落し穴と、楕円形の４号・５号落し穴がそれぞれ約６～９ｍの間隔で並んでおり、同時期に造られた可能性がある。落し穴はけもの道に沿って造られると考えられ、これらの線を結ぶとけもの道が推定できる。底面が楕円形の落し穴はけもの道に対して、短軸を結ぶ形で配置されており、市内・中尾遺跡[註10)]の状況と一致する。

以上、当遺跡は縄文時代から中世に至る複合遺跡であることがわかった。調査は道路部分に限定されており、未解決の部分も多いが今後の調査研究に委ねたい。

註

1　岡平拓也　「下米積地区（船沖遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書11』　倉吉市教育委員会　2001

2　巽淳一郎　「土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報（第５・６次）』　倉吉市教育委員会　1979

3　田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981

4　土井珠美　「鳥取県の状況」『弥生後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』　第18回埋蔵文化財研究会事務局　1986

5　竹宮亜也子　『山名氏館跡推定地発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1993

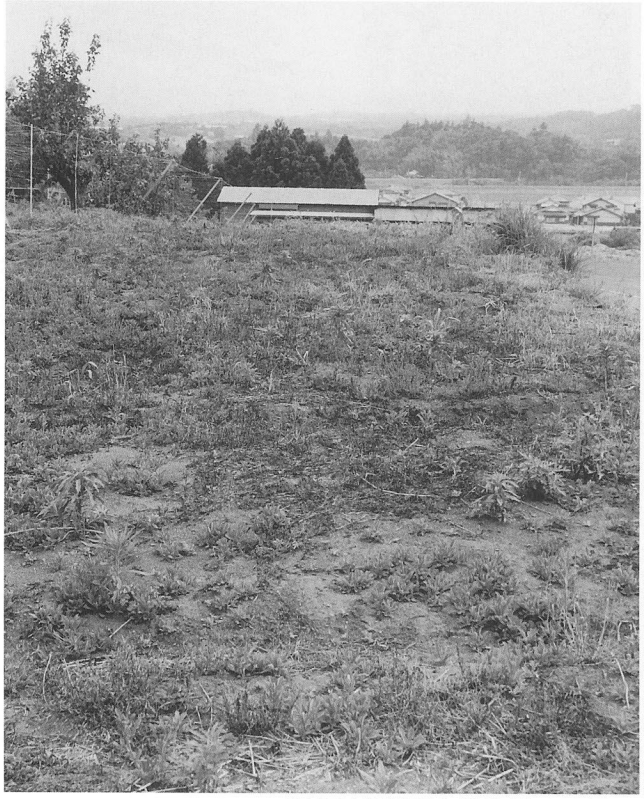
6　古代の土器研究会編　『古代の土器１　都城の土器集成』　1992

7　竹中孝浩　「平成４年度調査」『長谷遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1994

8　財団法人鳥取県教育文化財団編　『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書　Ⅲ』　財団法人鳥取県教育文化財団　1981

9　西川徹　「土壙墓（ＳＸ－01）について」『福岡遺跡』　財団法人鳥取県教育文化財団　1992

10　竹中孝浩　「縄文時代の調査」『中尾遺跡発掘調査報告書』　倉吉市教育委員会　1992

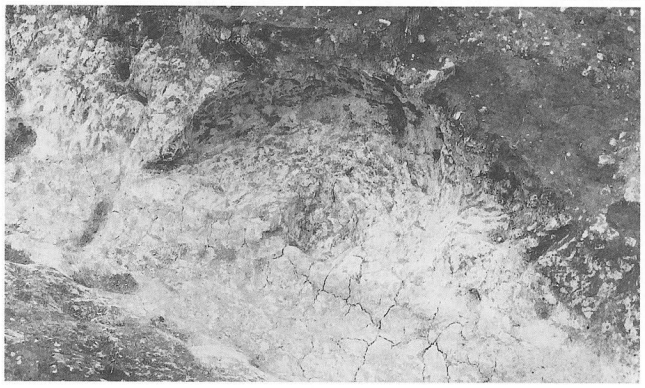


調査区北側調査前全景（北から）

調査区北側調査後全景（南から）

１号墳墓（南から）

１号土壙墓（南西から）



１号貯蔵穴（南から）

２号貯蔵穴（南から）

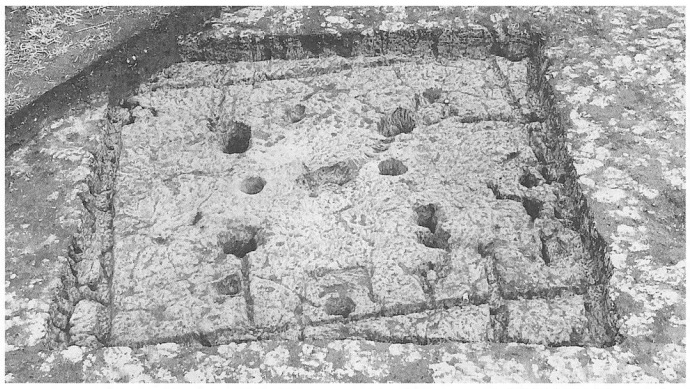
図版２

調査区南側調査前全景（北東から）

調査区南側調査後８号・９号住居付近（南東から）

調査区南側調査後全景（北東から）

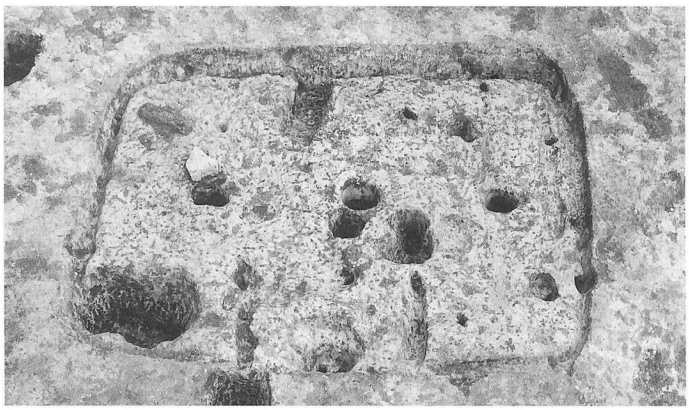
調査区南側調査後全景（南西から）



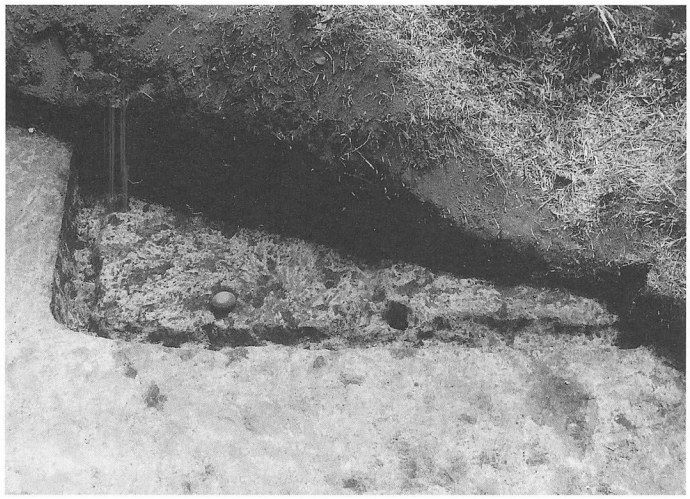
１号住居（南から）

２号住居（北西から）

３号住居（北西から）

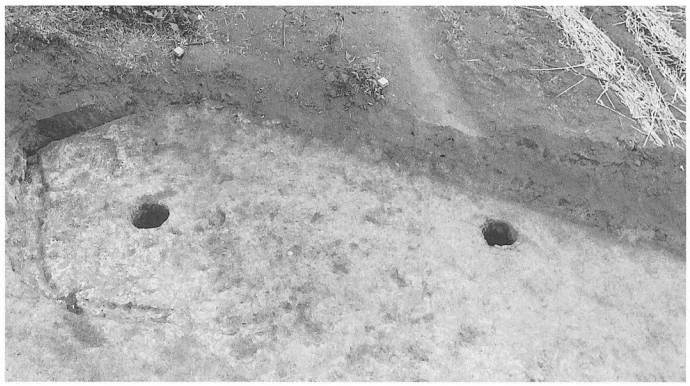


４号住居（南から）



５号住居（西から）

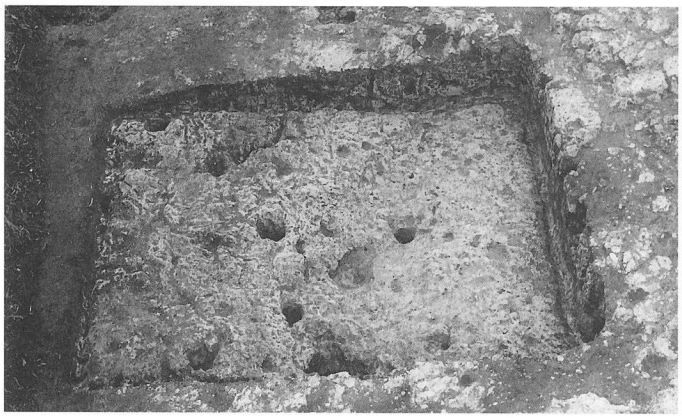
６号住居（南から）



７号住居（北西から）

８号住居（北東から）

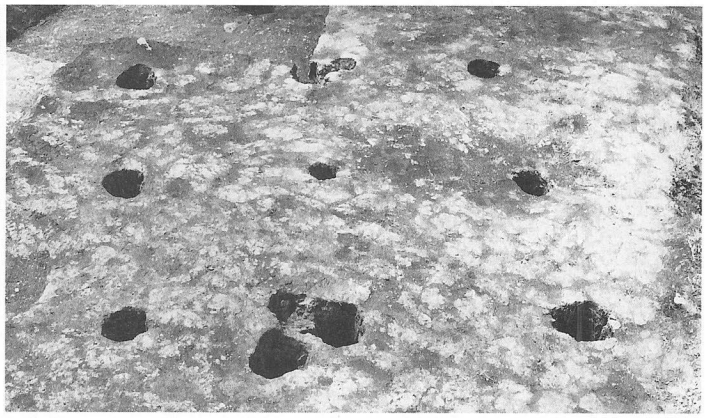
図版４



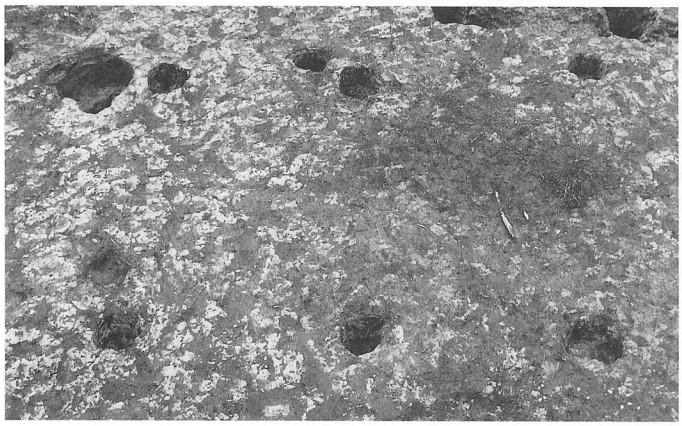
９号住居（南東から）

１号掘立柱建物（東から）

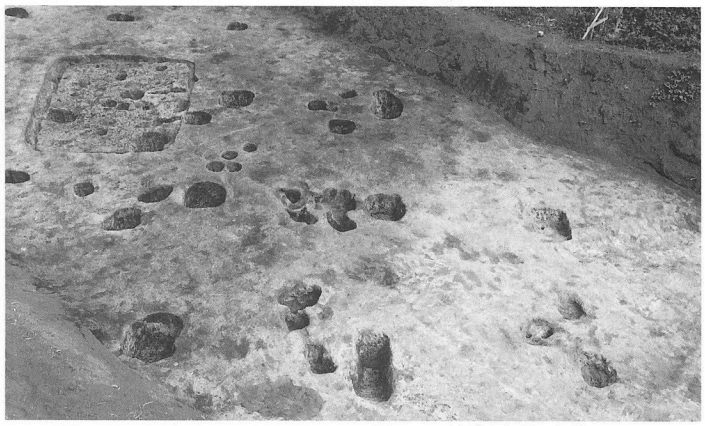
２号掘立柱建物（北西から）



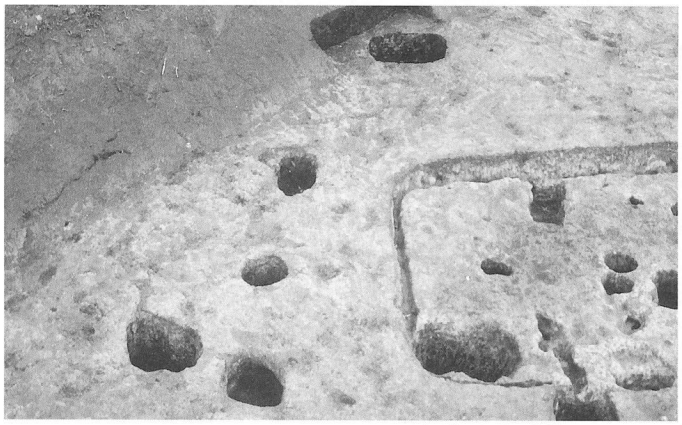
３号掘立柱建物（南東から）



４号掘立柱建物（東から）



５号・10号掘立柱建物（西から）



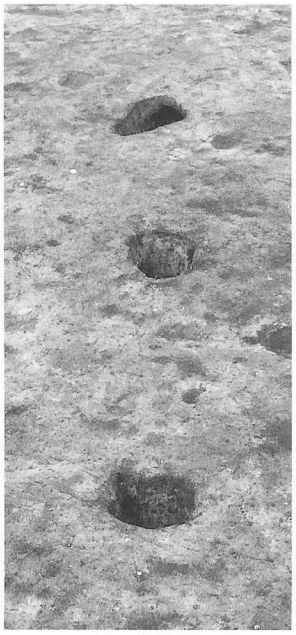
６号掘立柱建物（南から）

７号掘立柱建物（北西から）

８号掘立柱建物（北西から）

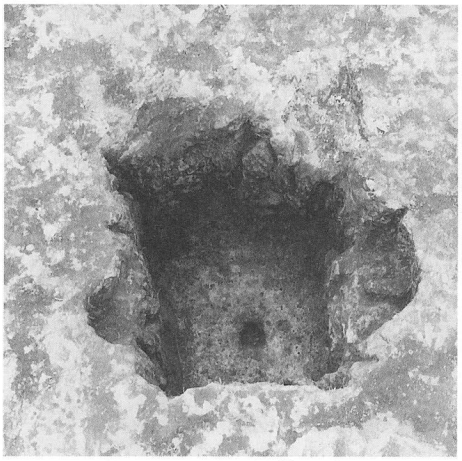
９号掘立柱建物（南北から）

１号段状遺構（南から）



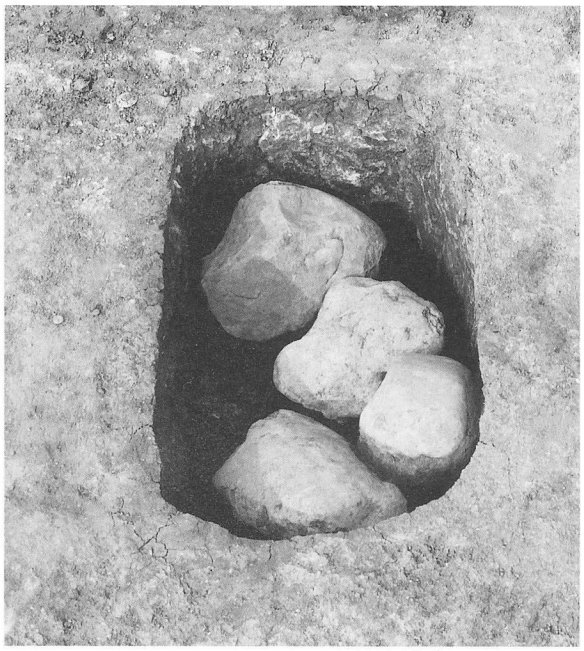
１号柵列（南から）

２号柵列（西から）



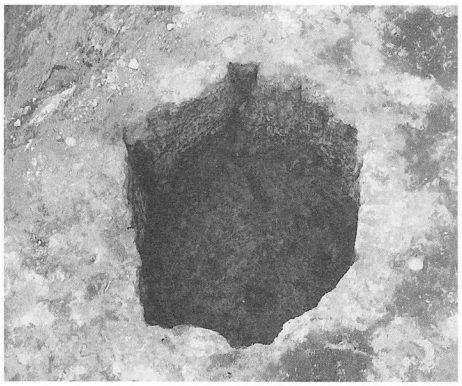
１号落し穴（西から）

２号落し穴（北東から）



２号土壙墓（南西から）

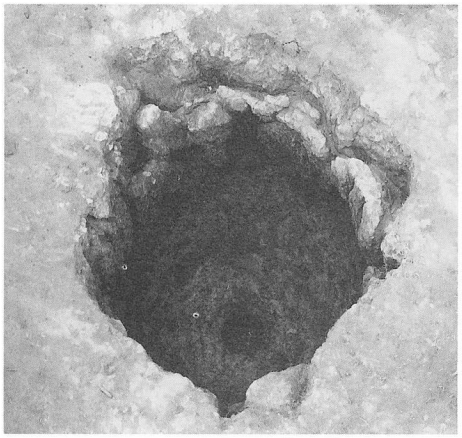
図版６



３号落し穴（南東から）

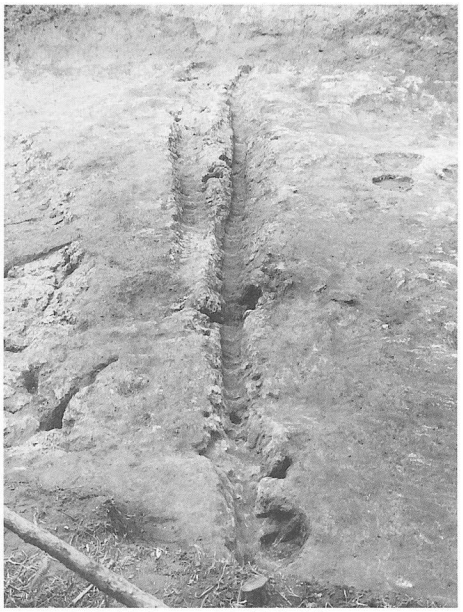
４号落し穴（南から）

５号落し穴（北西から）



６号落し穴（東から）

１号土壙（南西から）



１号（左）・２号（右）溝（南西から）

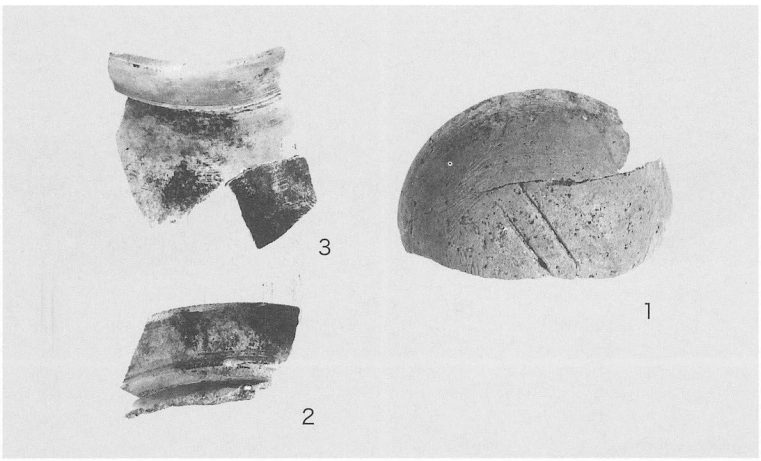
２号土壙（北西から）

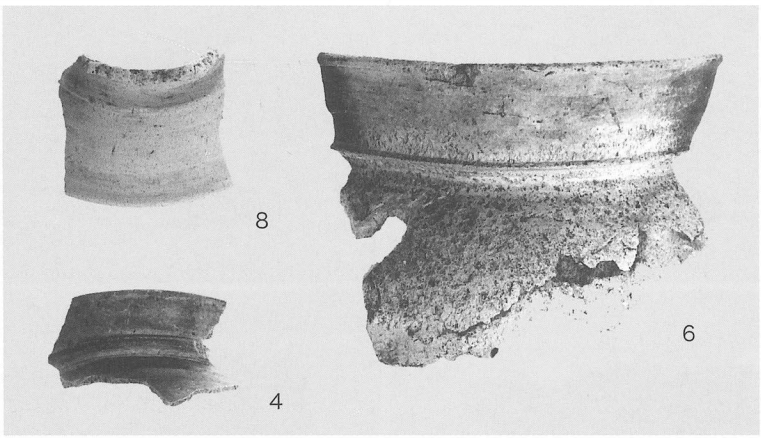
３号土壙（北西から）

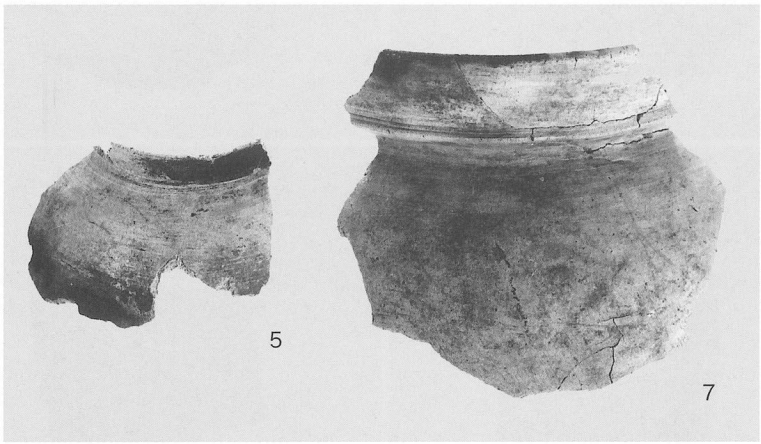
４号土壙（北から）

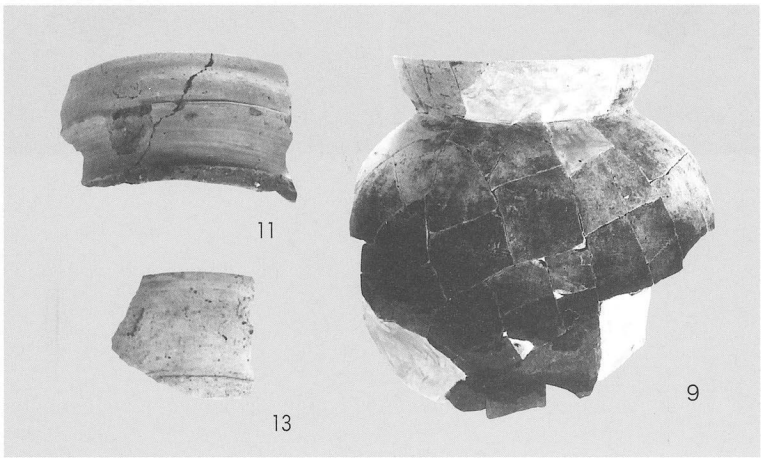
５号土壙（南から）

３号溝（北西から）





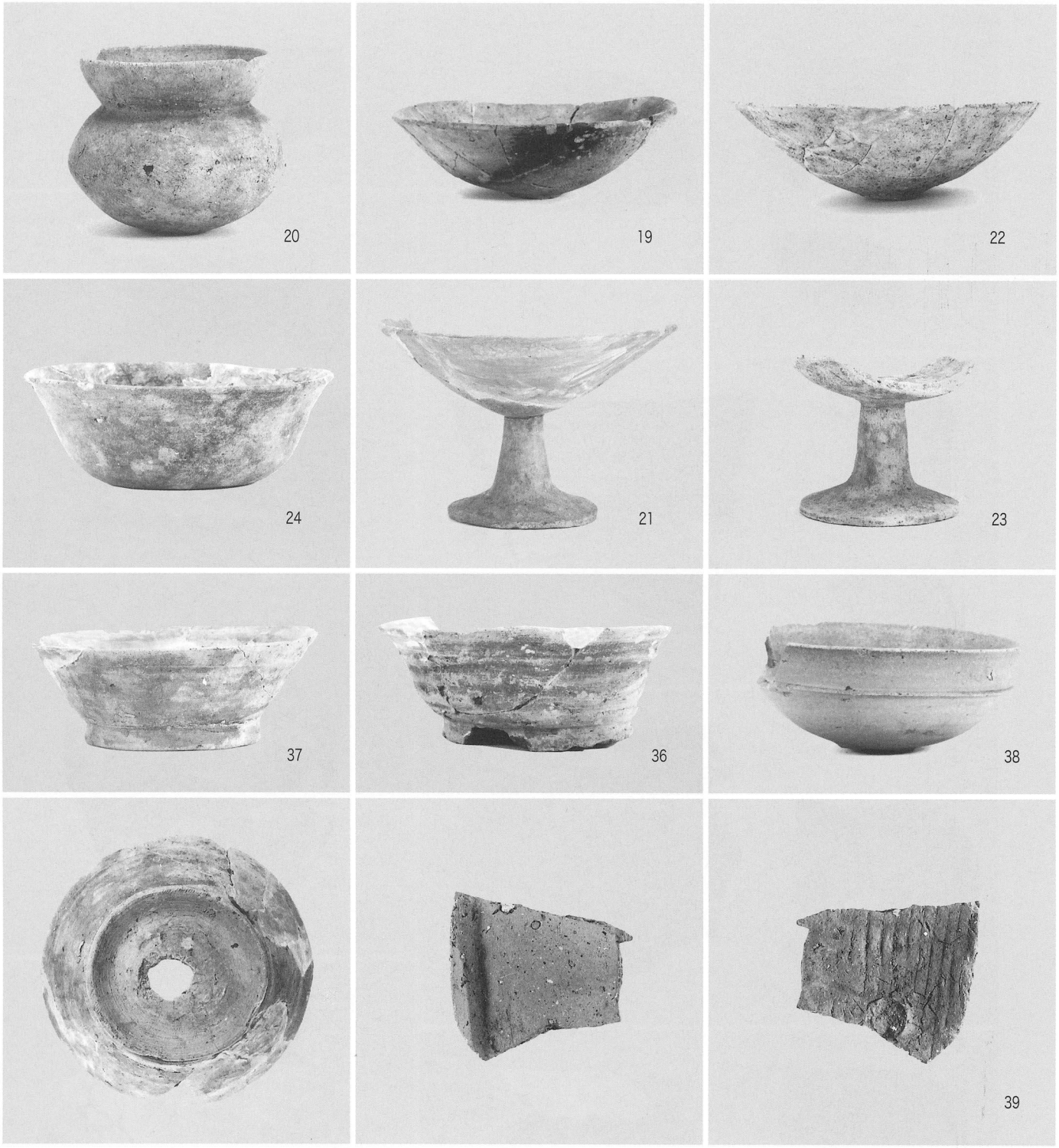




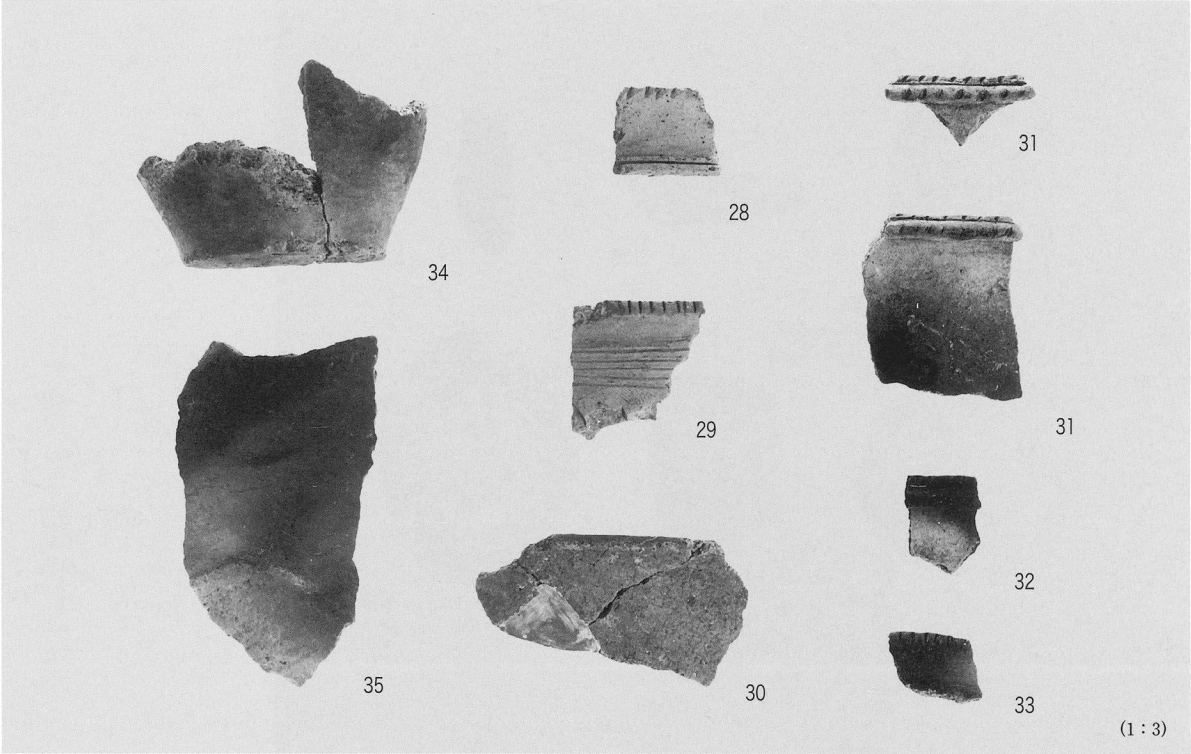
(1：4)

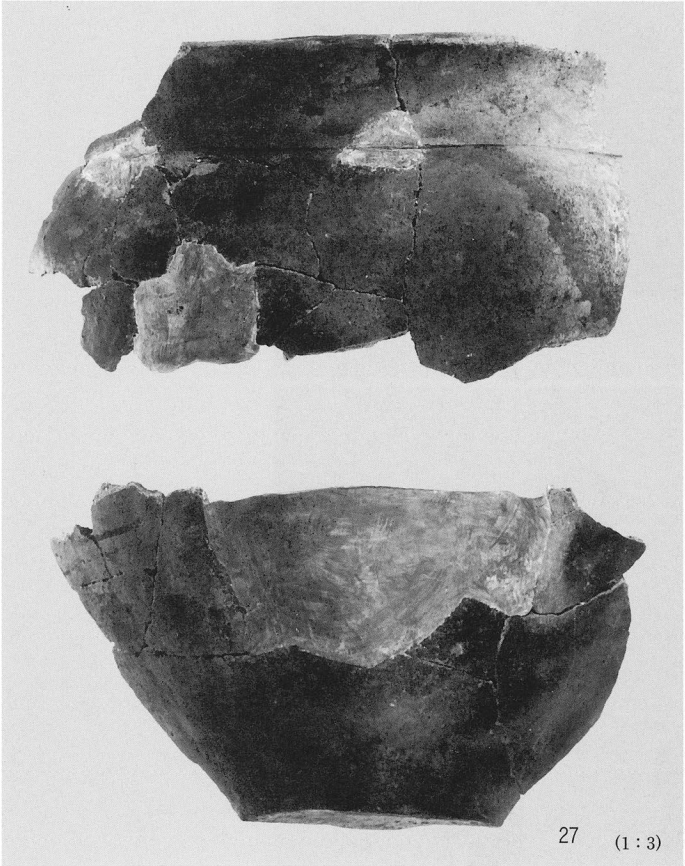
図版８

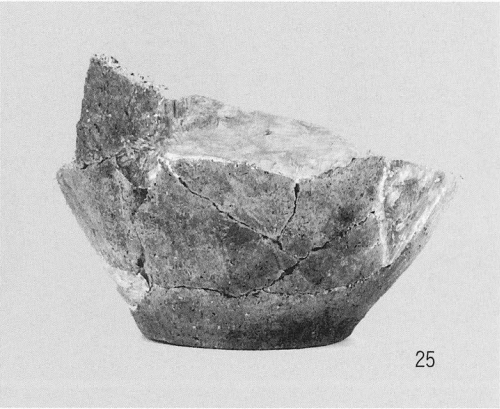
８号・９号住居、１号土壙墓、遺構外出土遺物

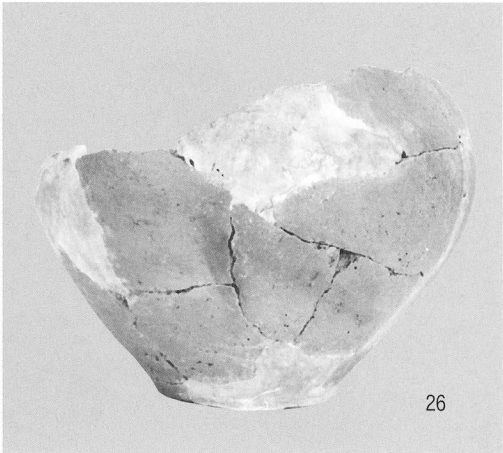


(1：2)


34
28
31
31
29
35
30
32
33
(1：3)

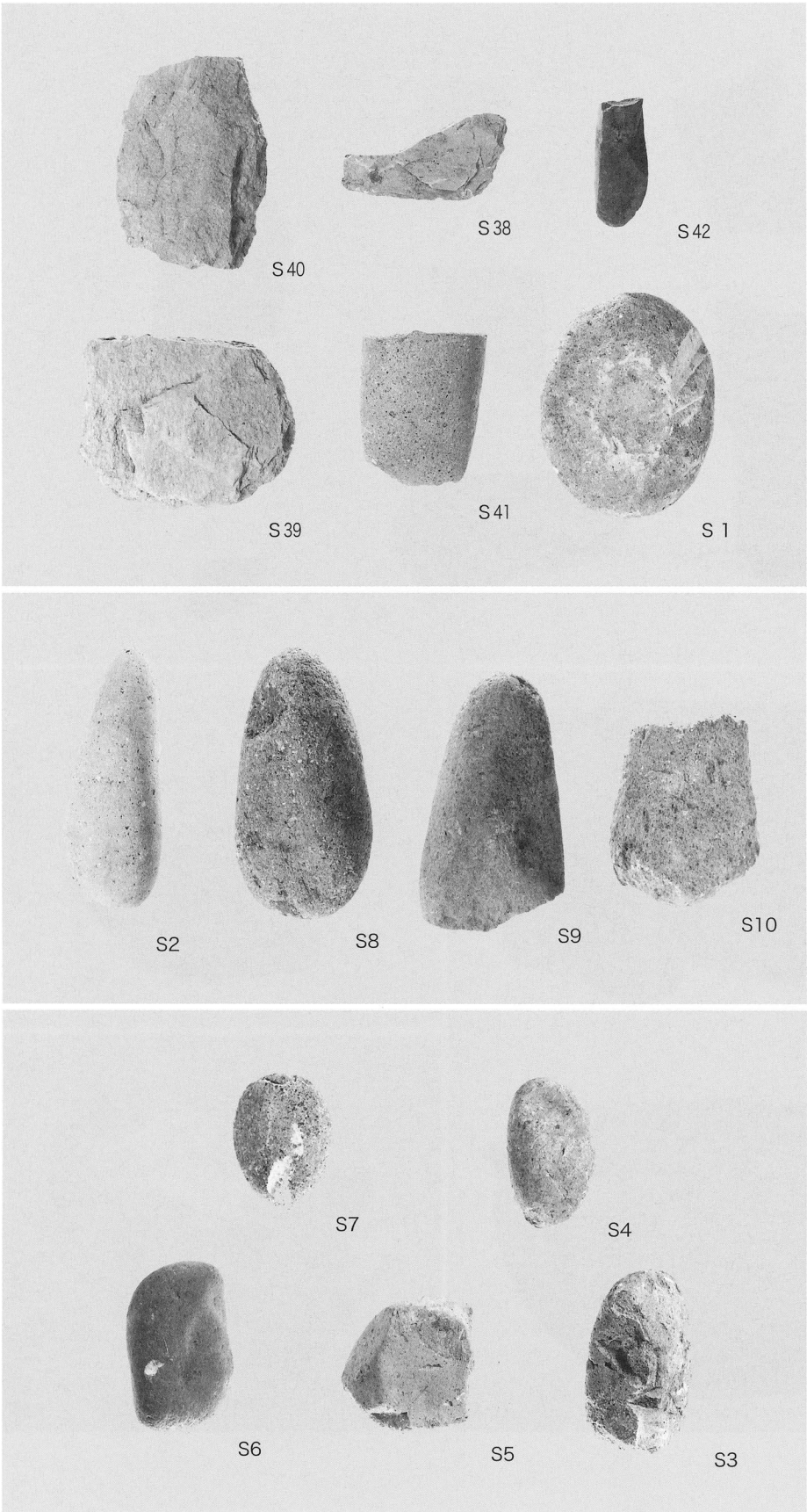

27
(1：3)


25

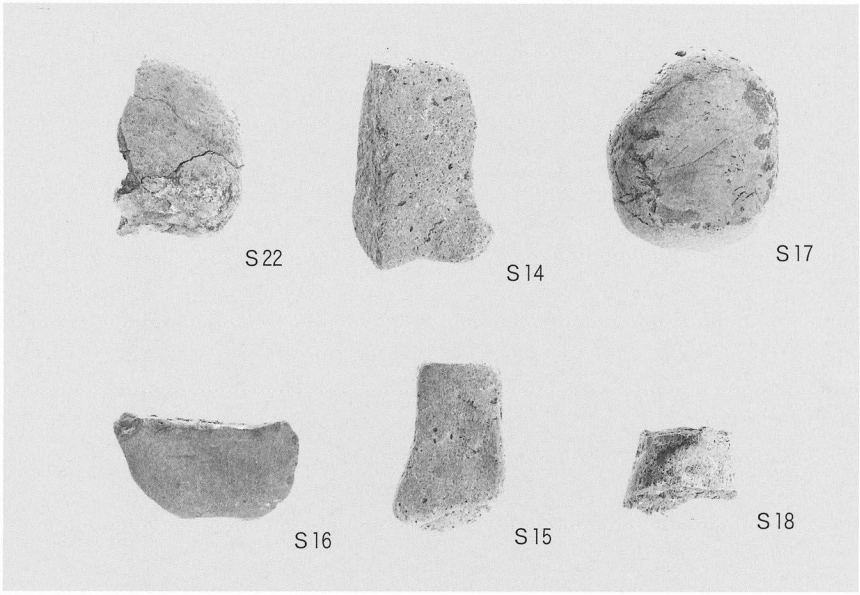

26

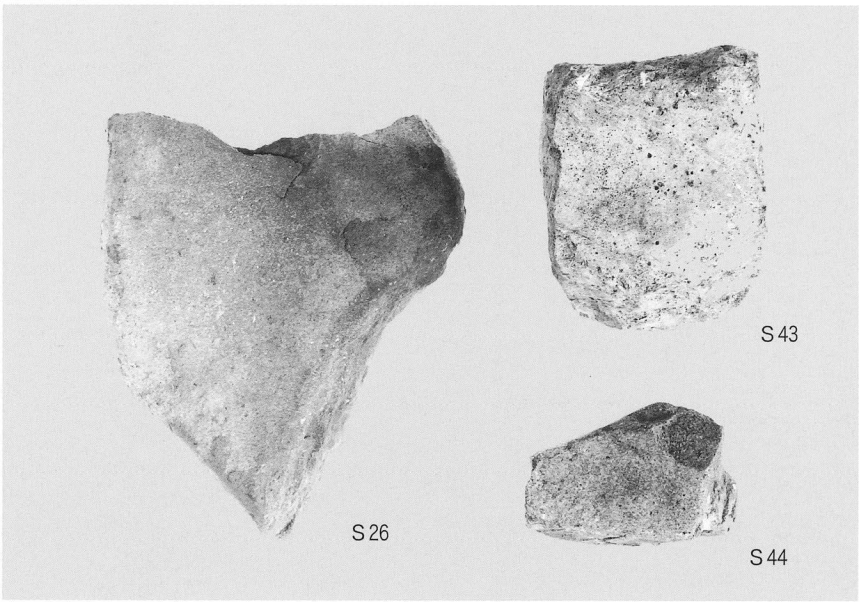
図版10

凹石・敲石・磨製石斧・打製石斧・砥石



(1：4)





(1：4)

報告書抄録

書名	船沖遺跡発掘調査報告書
副書名	県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	—
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第１１１集
編著者名	加藤誠司
編集機関	倉吉市教育委員会
所在地	〒682－8611　鳥取県倉吉市葵町722番地　ＴＥＬ0858－22－4419
発行年月日	西暦２００１年２月２８日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
船沖遺跡	倉吉市下米積字船沖・上乳母ヶ谷、上米積字船沖	31203：４ＯＳＦ	35°25′25″	133°45′55″	20000601～20000929	2500㎡	県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物	特記事項
船沖遺跡	集落	縄文：落し穴　６基 古墳：竪穴式住居　９棟 掘立柱建物　11棟 弥生～古墳：貯蔵穴　２基 奈良：土壙墓　１基 平安：段状遺構　1 墳墓　１基 中世：土壙墓　１基 古墳以降：柵列　5 土壙　５基 溝　４条	弥生土器・土師器・須恵器・凹石・敲石・磨石・台石 石皿・磨製石斧・打製石斧・砥石	古墳時代前期～後期の集落址。

210.2
Kur
(111)
図書館

船沖遺跡発掘調査報告書

県営久米ヶ原地区担い手育成畑地帯
総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成13年２月28日　印刷
平成13年２月28日　発行

編集
発行　倉吉市教育委員会

印刷
製本　山本印刷株式会社